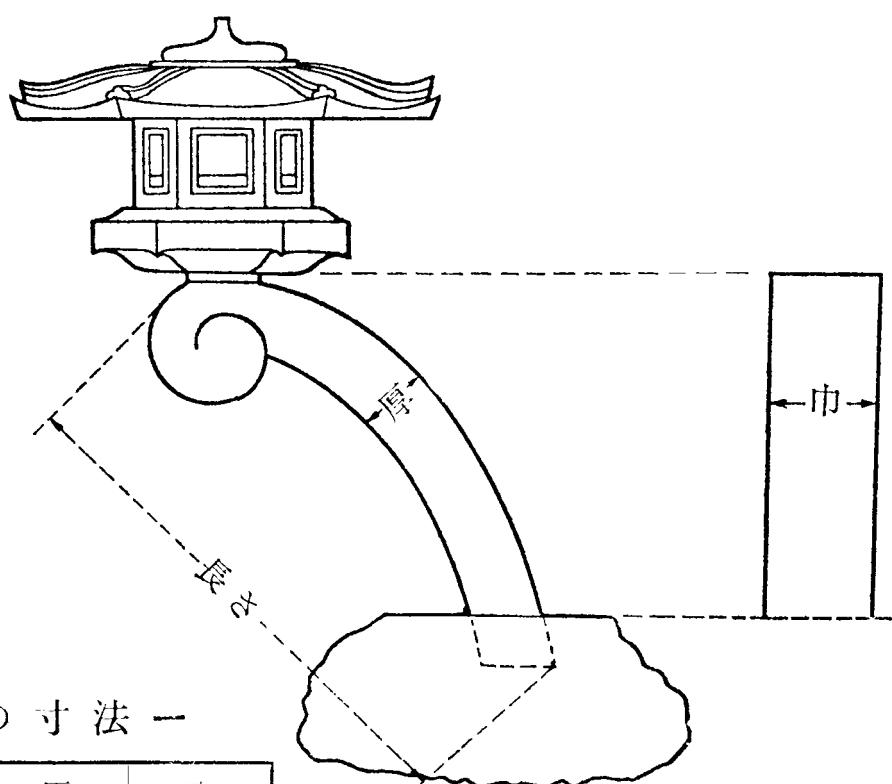


蘭 溪 形 灯 篓

2 尺拾分の壱



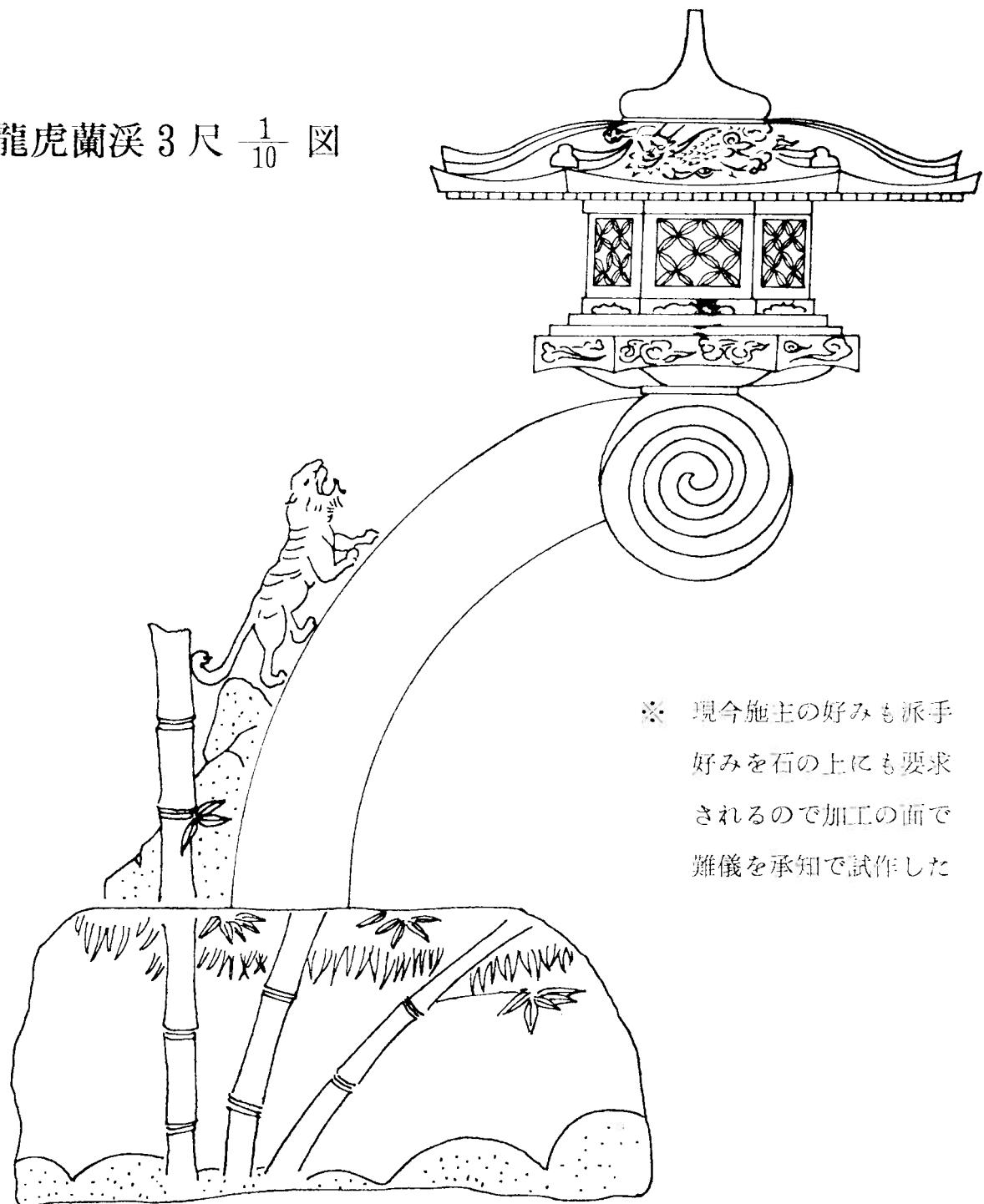
足 の 寸 法 一

長	厚	巾
120%	20%	25%

※ 足の寸法比率は傘の径を100%とした基準による。

※ 傘、火、受の寸法は六角雪見同じである。

龍虎蘭溪 3 尺 $\frac{1}{10}$ 図



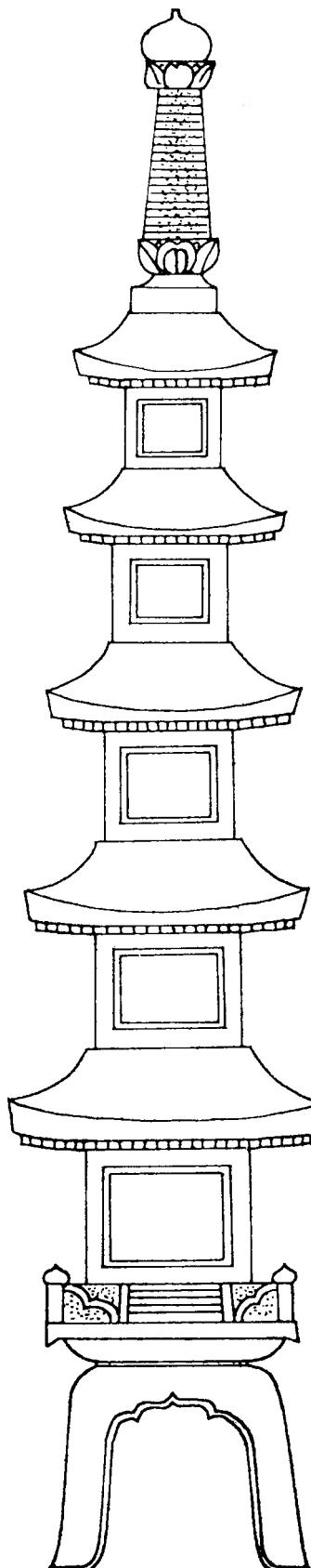
※ 現今施主の好みも派手
好みを石の上にも要求
されるので加工の面で
難儀を承知で試作した

五重塔

※ 各寸法の比率は塔の総高さを基準とする。

下傘の径は割出し寸法より若干大きい方が出来上り姿が佳い。

※ 塔壇基の簡単な才出し法は傘の角寸法×角寸法に塔の総高を掛けて出た才数の約20%引けば壇基の目安才数が出る。



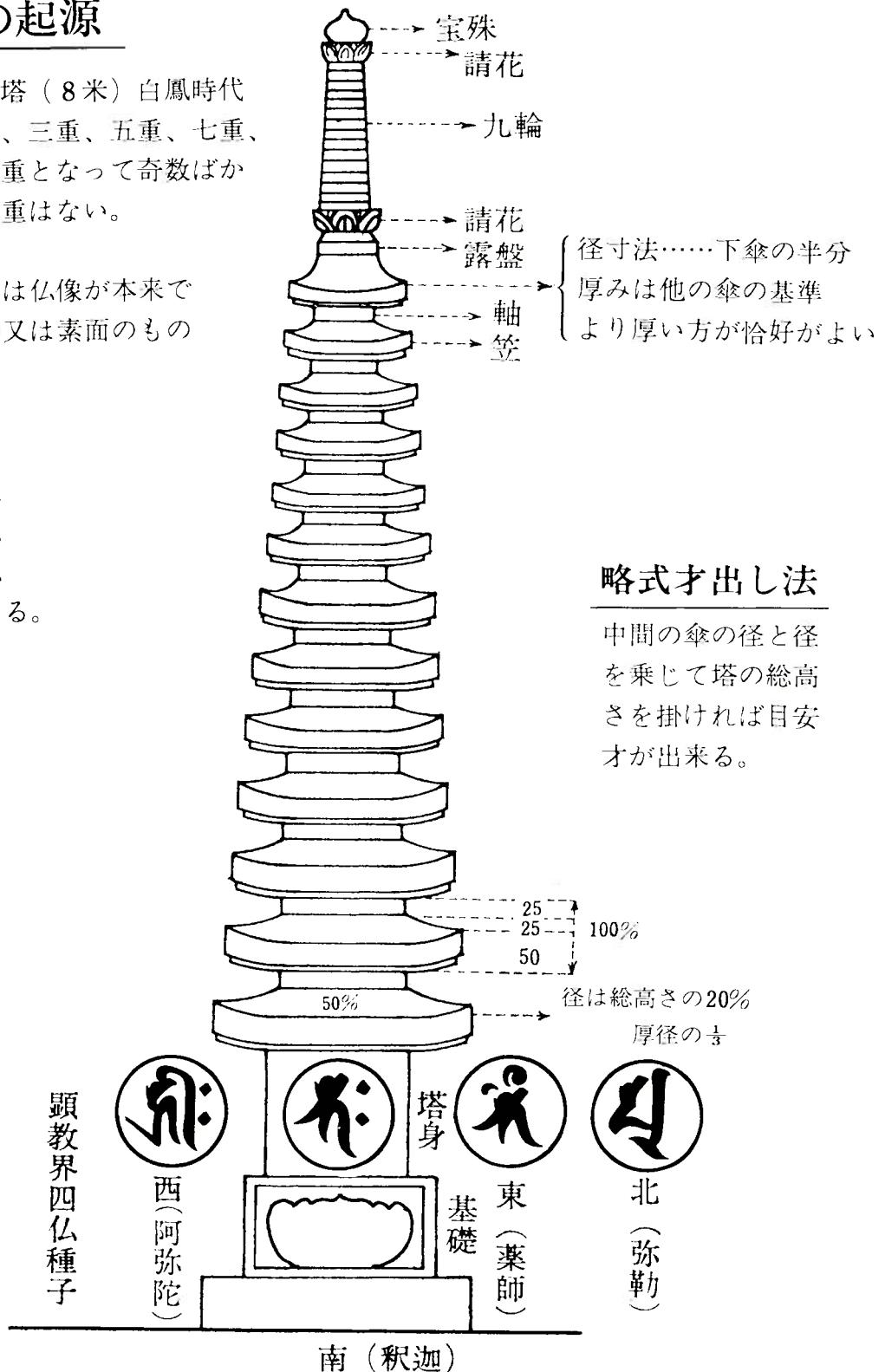
横 径	高
台座の角 6 %	台座の角の 3 倍半
10 %	角の $\frac{1}{2}$
6 %	角寸法の 10 % 落ち
13 %	角の $\frac{1}{4}$
7 %	上記火袋同
15 %	角の $\frac{1}{5}$
8 %	上記火袋同
18 %	角の $\frac{1}{6}$
9 %	上記火袋同
20 %	角の $\frac{1}{7}$
10 %	上記火袋同
中心傘径	角の $\frac{1}{8}$
16 %	16 %

十三塔の起源

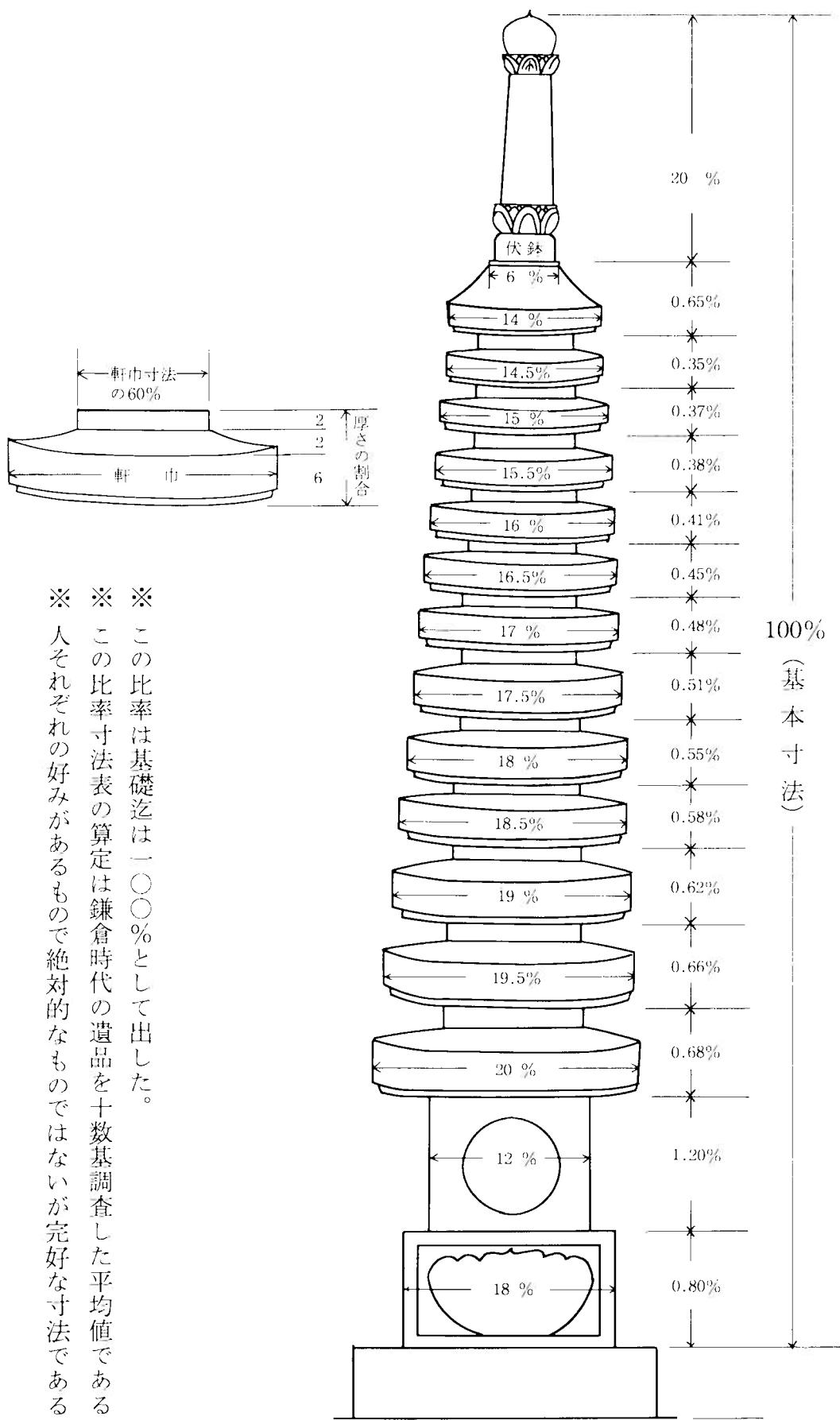
※石塔寺三重塔（8米）白鳳時代より発して、三重、五重、七重、九重、十三重となって奇数ばかりだが十一重はない。

※塔身の四面は仏像が本来であるが種子又は素面のものもある。

※像容は、
金剛界四仏
胎藏界四仏
顯教界四仏
の三様である。



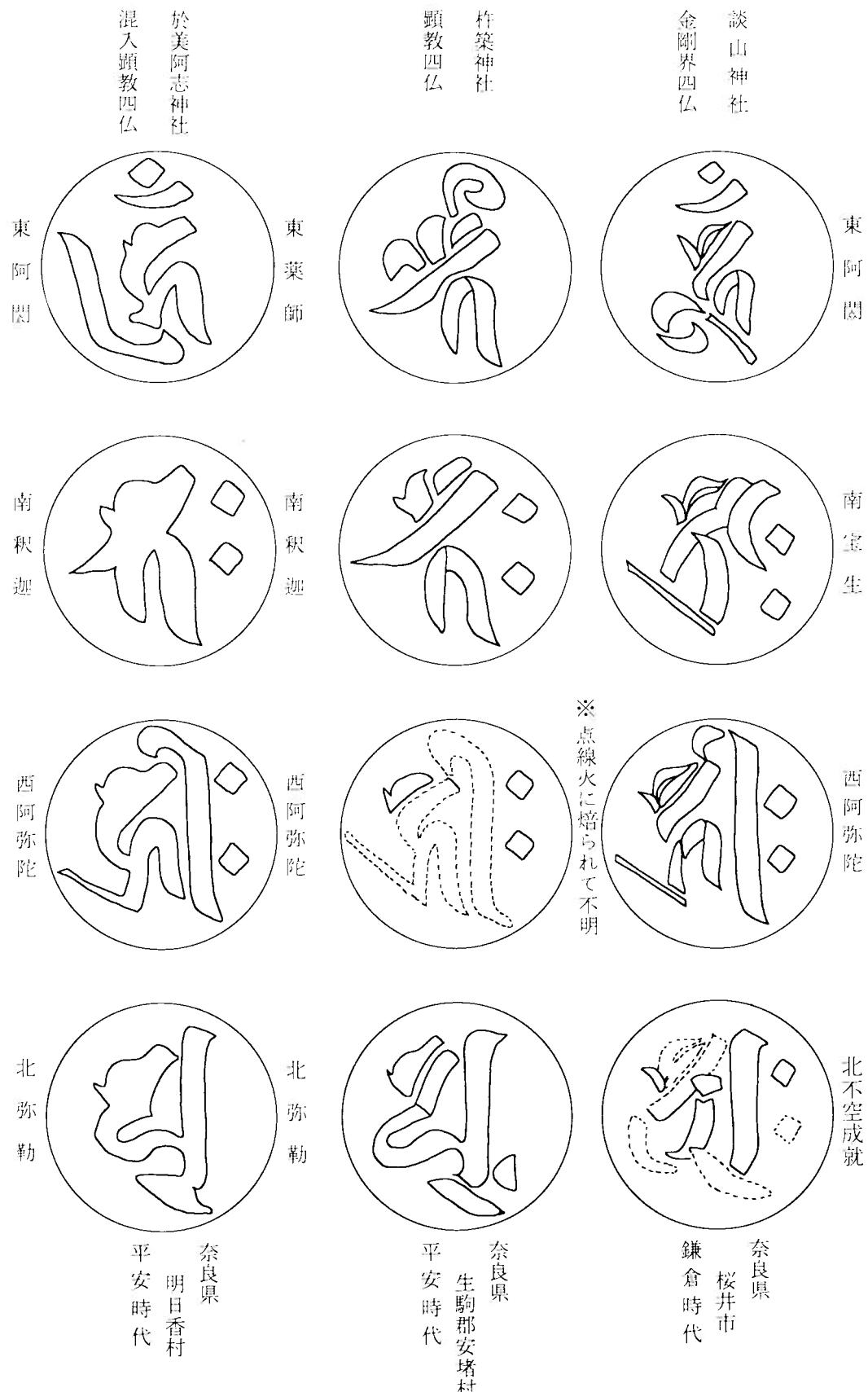
十三層塔寸法比率表



※ ※ ※

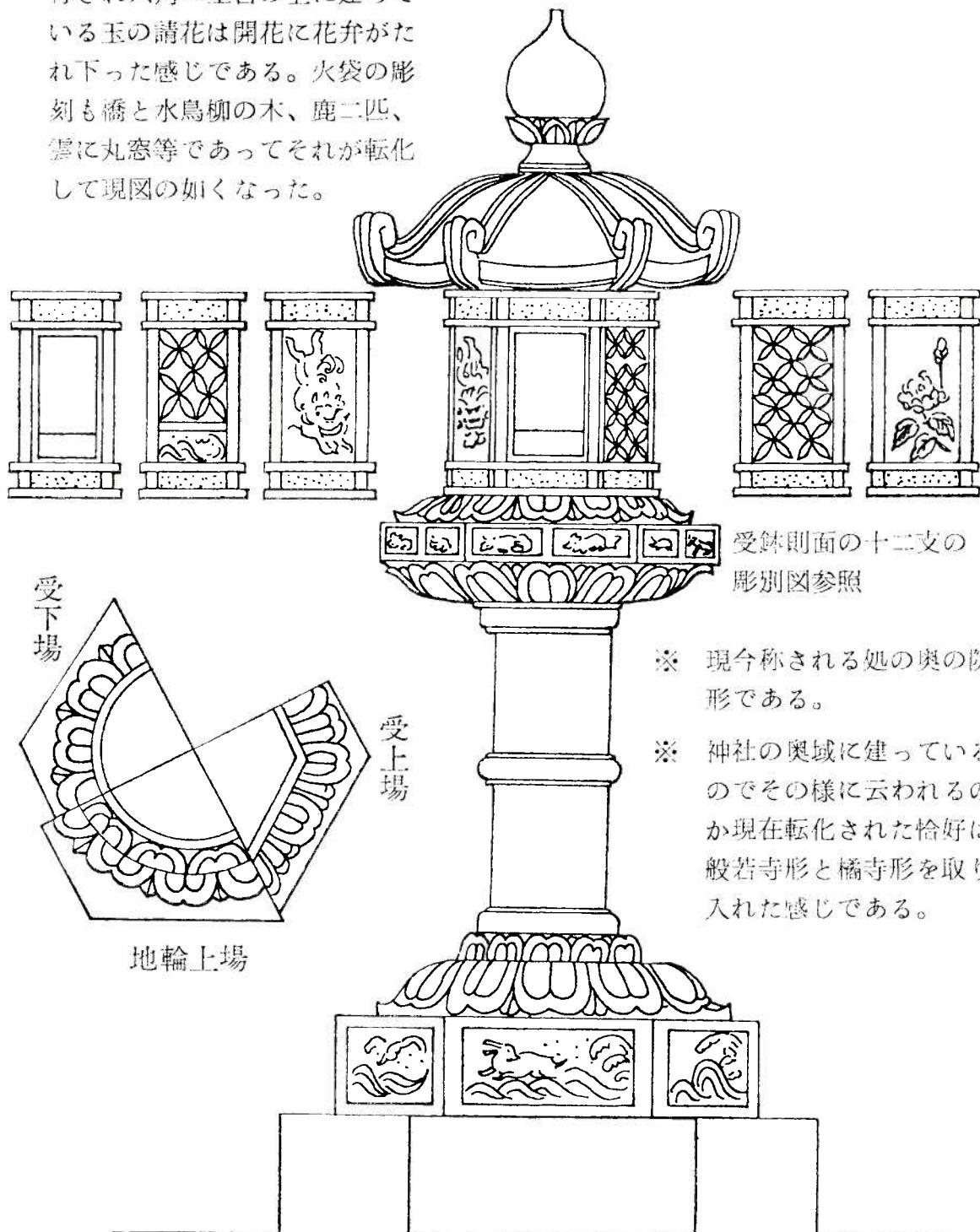
この比率は基礎迄は一〇〇%として出した。
この比率寸法表の算定は鎌倉時代の遺品を十数基調査した平均値である。
人それぞれ好みがあるもので絶対的なものではないが完好な寸法である。

層塔禁字の種々

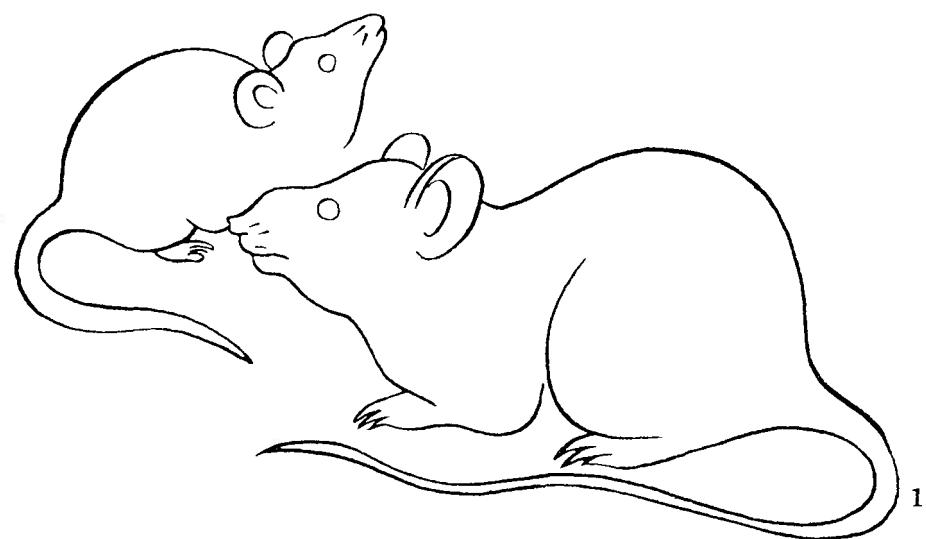


奥の院形灯籠

※ 春日神社奥にあるのを奥の院と称され六角二重台の上に建っている玉の請花は開花に花弁がたれ下った感じである。火袋の彫刻も橋と水鳥柳の木、鹿二匹、雲に丸窓等であってそれが転化して現図の如くなつた。



奥の院受側面彫刻十二支の内

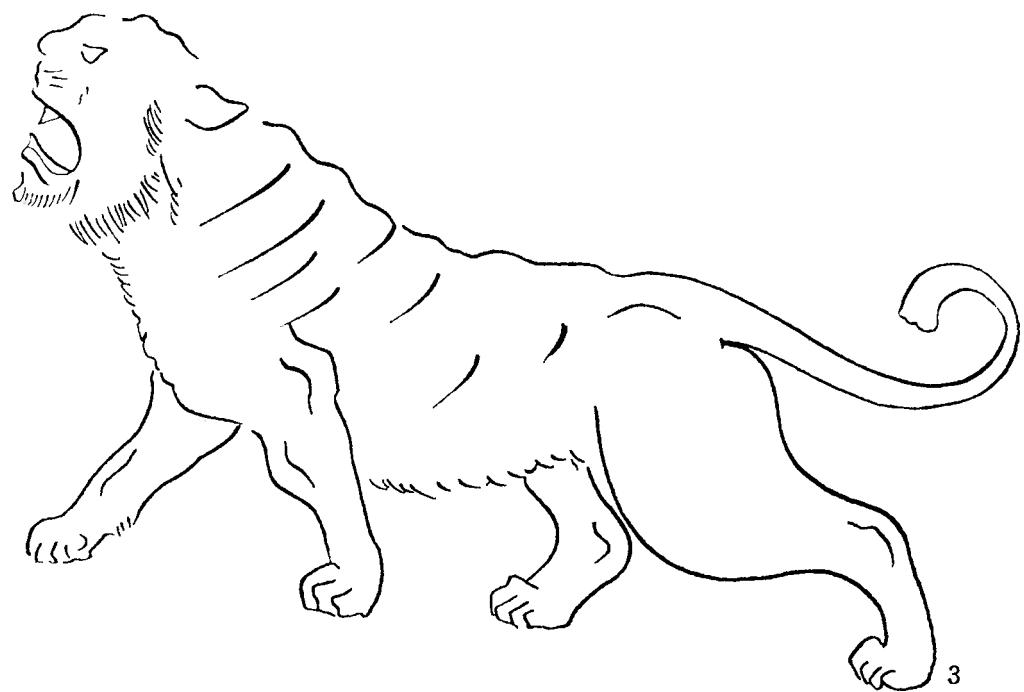


1

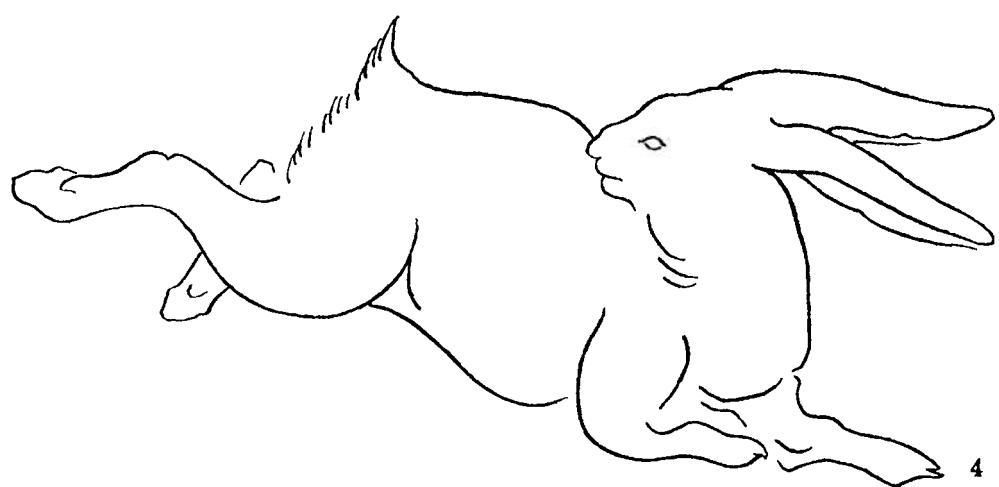


2

奥の院受側面彫刻図

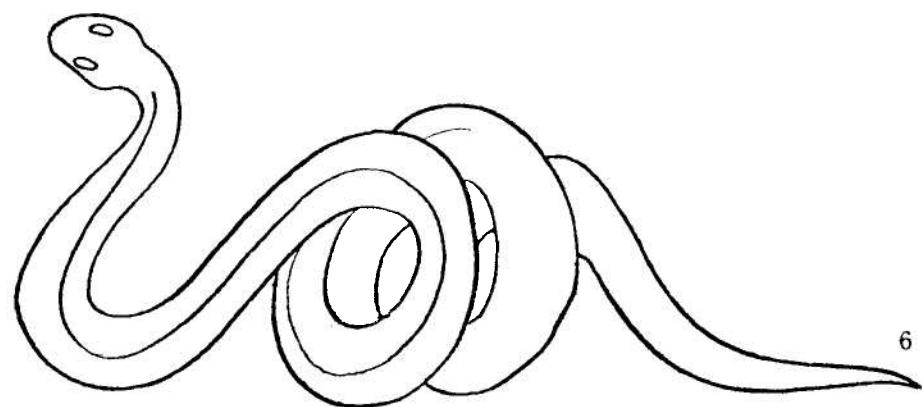
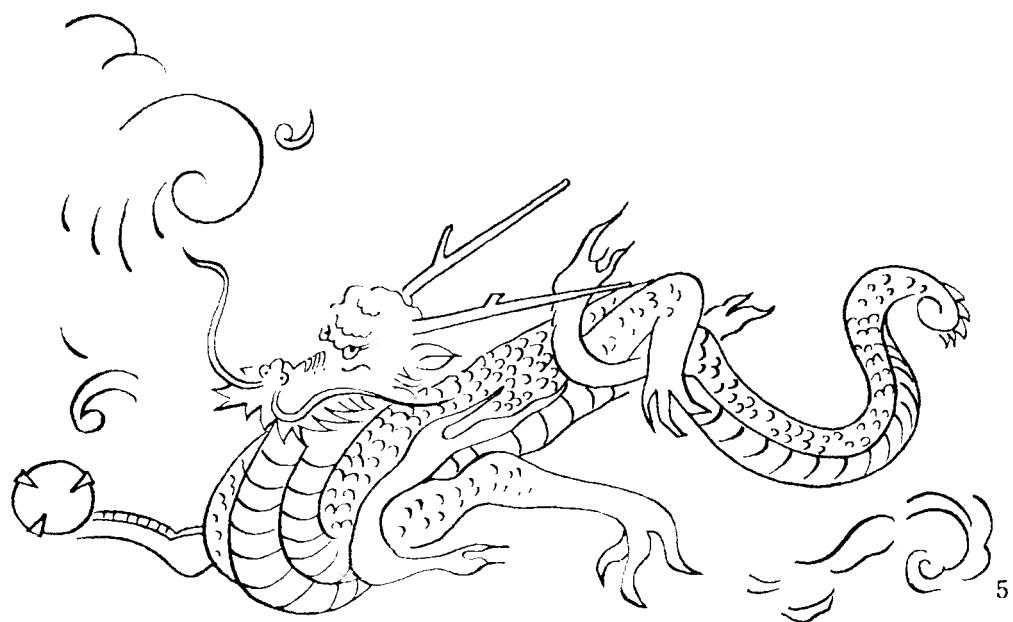


3

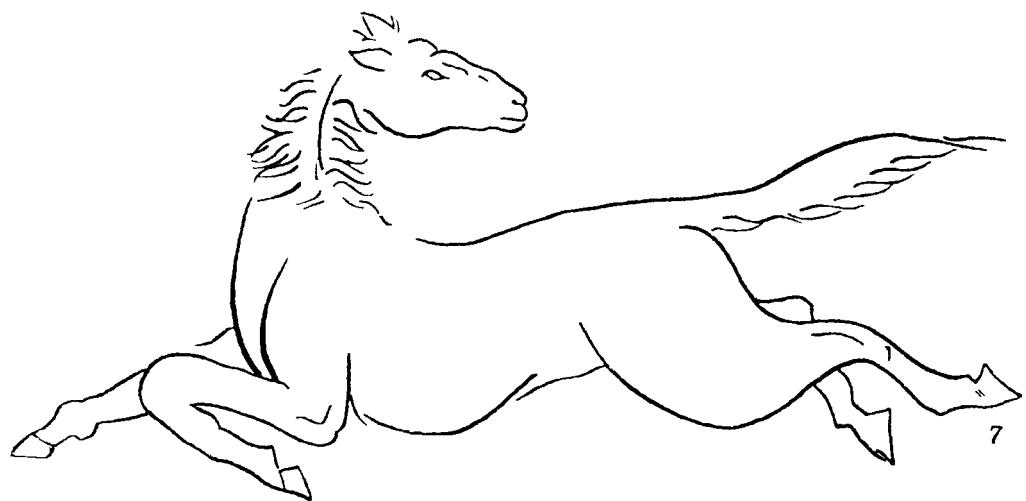


4

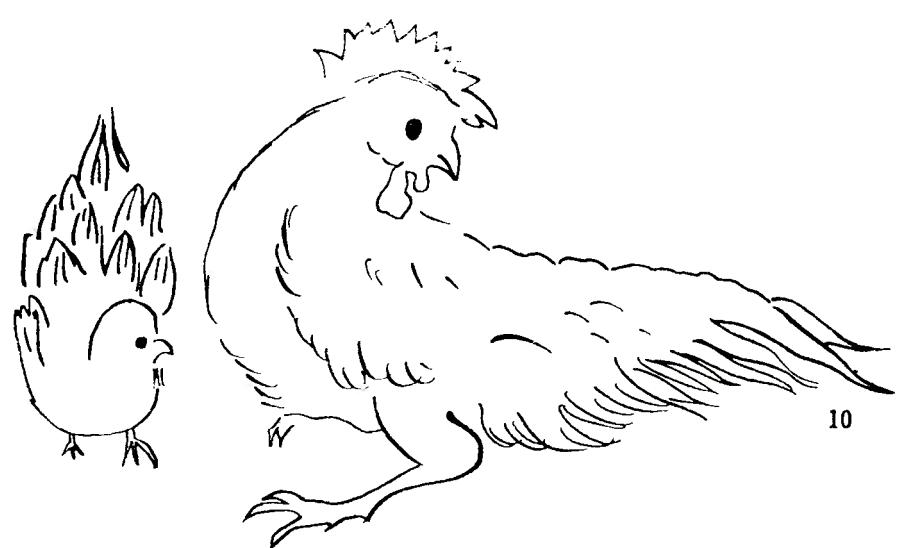
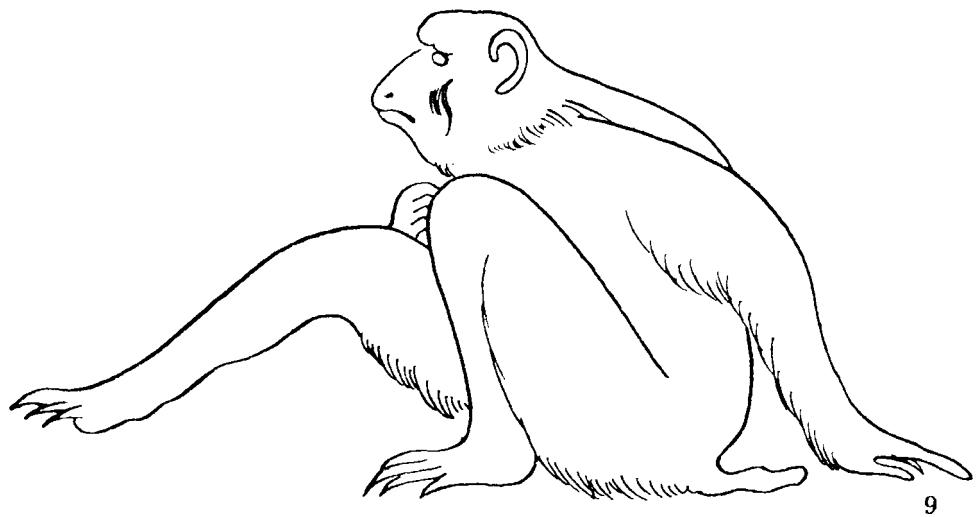
奥の院受側面彫刻十二支の図



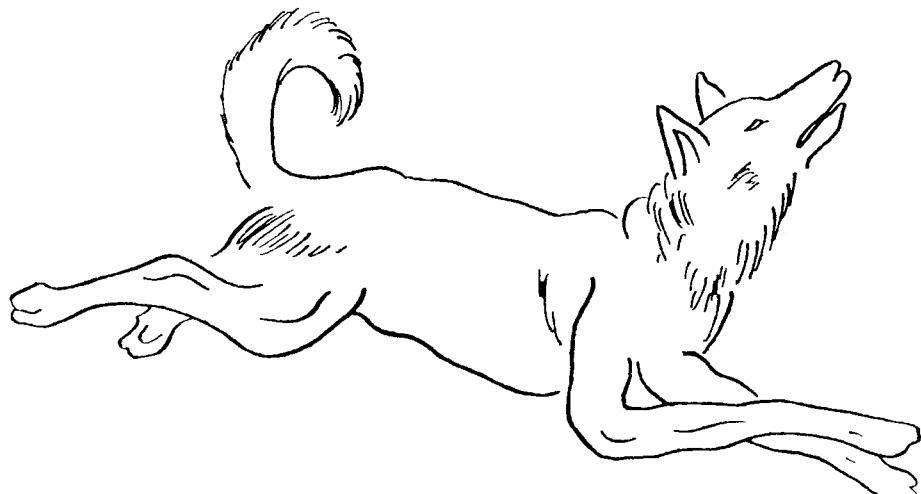
奥の院受側面彫刻十二支の図



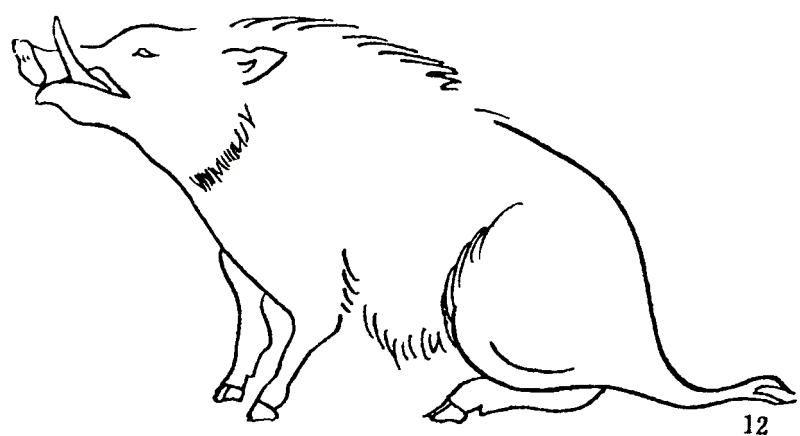
奥の院受側面彫刻十二支の図



奥の院受側面彫刻十二支の図

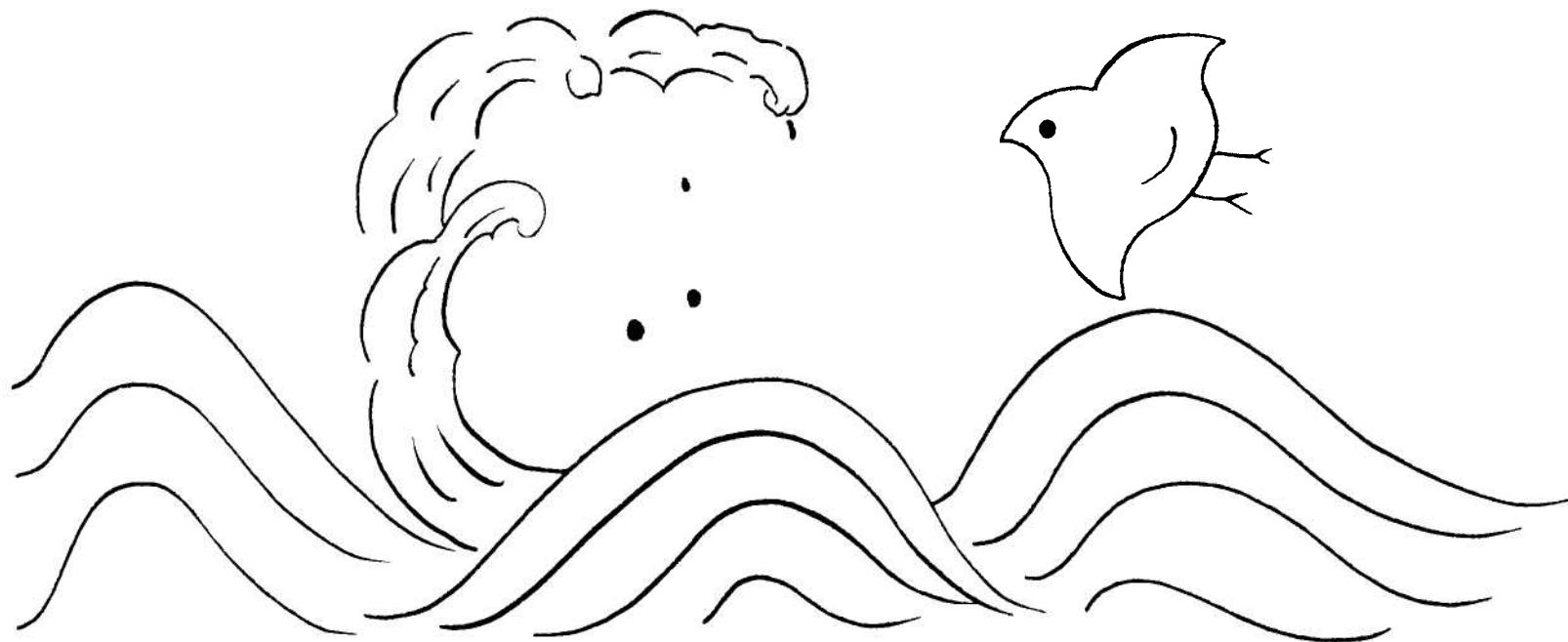


11



12

奥の院地輪側面彫刻図



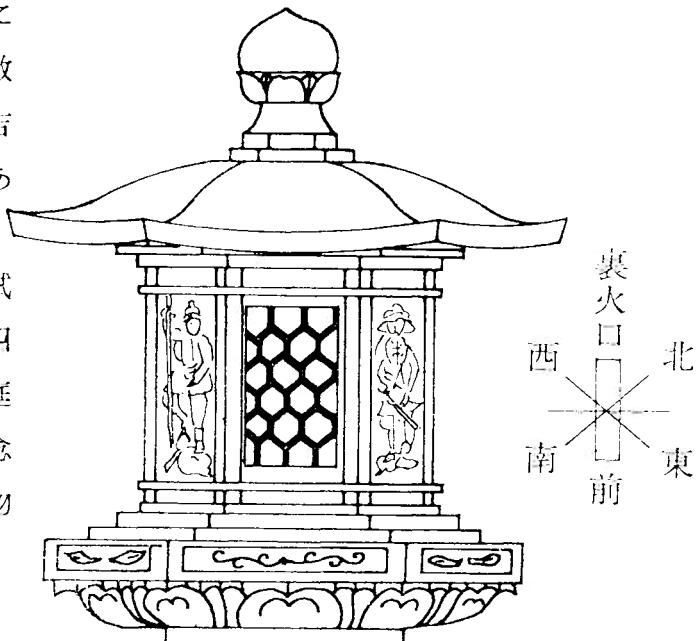
奥の院地輪側面彫刻図



招福灯籠

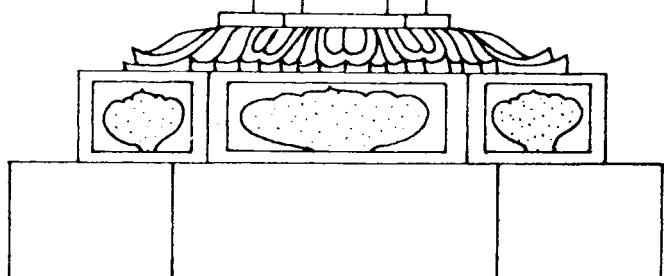
※ 惣いと暮しの吾が家の建築に当り方位方角に吉凶あるも敷地と家の構造上、意の如く吉方のみ出来ぬのが世の常である。

この様な場合に当り悪疾払拭の趣意のもとに護国鎮護の四天王の像を彫刻した灯籠を庭の飾りとかねて建てたらと念のもとにした筆者の創作物である。



- ※ 既に7尺と8尺式基を製作したがこの図は6尺版図となっている。
- ※ 受鉢の側面の盛物はこの図は前裏は唐草にして四天王の足下に当る処は散蓮花が陽刻してある。
- ※ 今一本は四天王それぞれの持物が陽刻しているのもある。
- ※ これは火袋に彫刻した四天王も狭い場所に彫刻すること故尊像の持物を充分判別出来ぬ場合を考慮して処置した。
- ※ 火袋正面に亀甲透しとした。

北 西 南 東
多聞 廣目 增長 持國
天像 天像 天像 天像



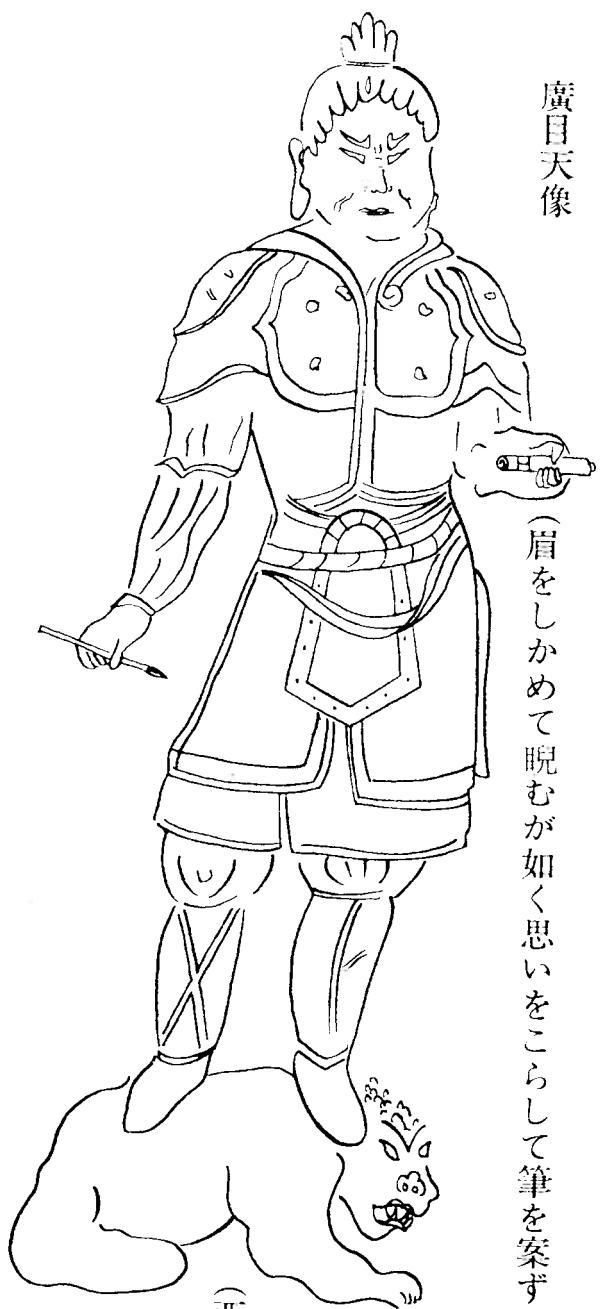
招福灯籠火袋盛物図



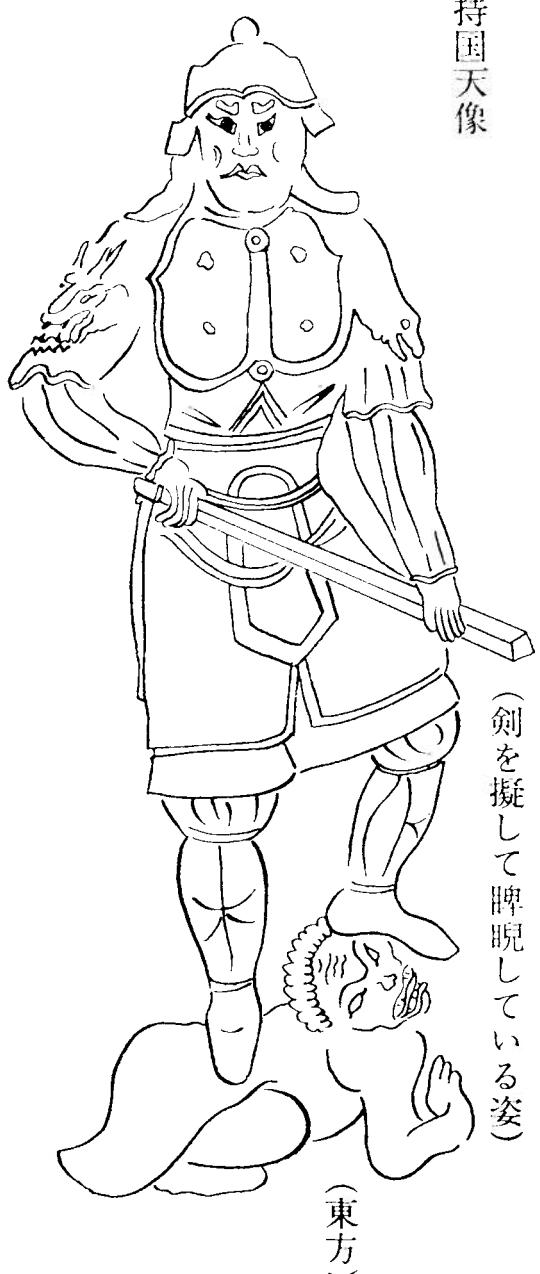
招福灯籠火袋盛物図

廣目天像

(眉をしかめて睨むが如く思いをこらして筆を案ずる姿)



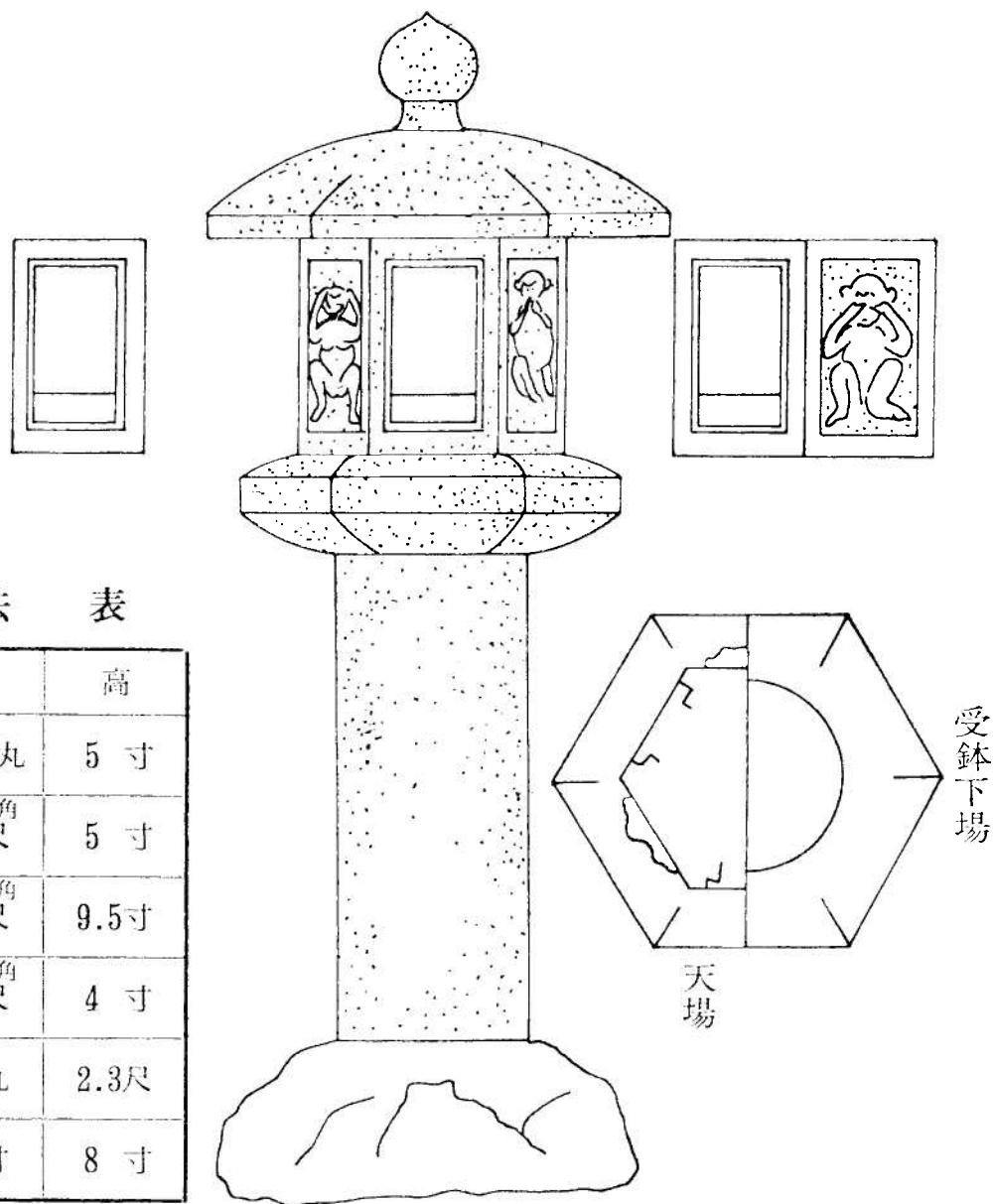
(西方)



(東方)

持國天像

(剣を擬して睥睨している姿)

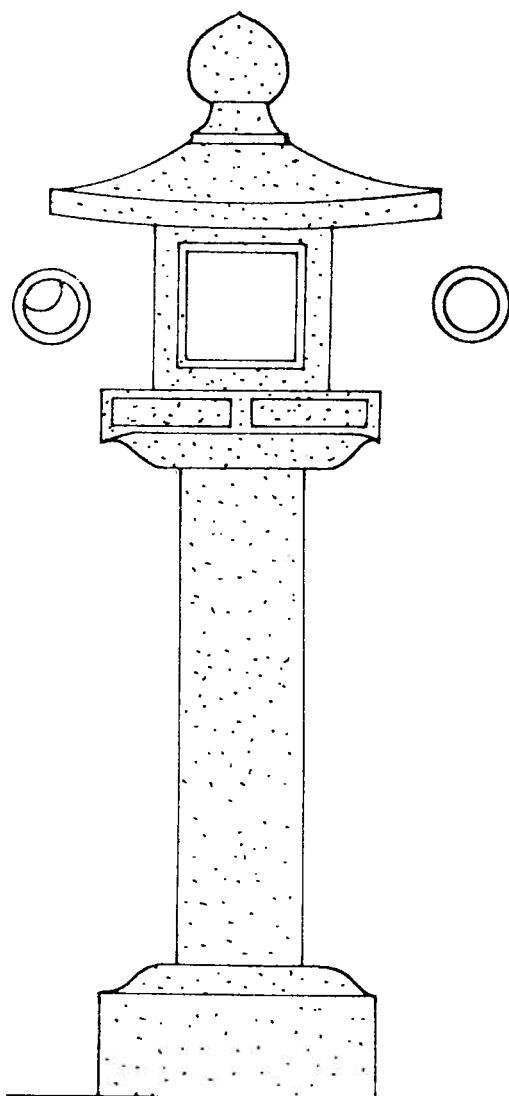


寸法表

	角	高
玉	5寸丸	5寸
笠	六角 2.2尺	5寸
火	六角 1.2尺	9.5寸
受	六角 1.8尺	4寸
柱	0.9丸	2.3尺
土台	18寸	8寸

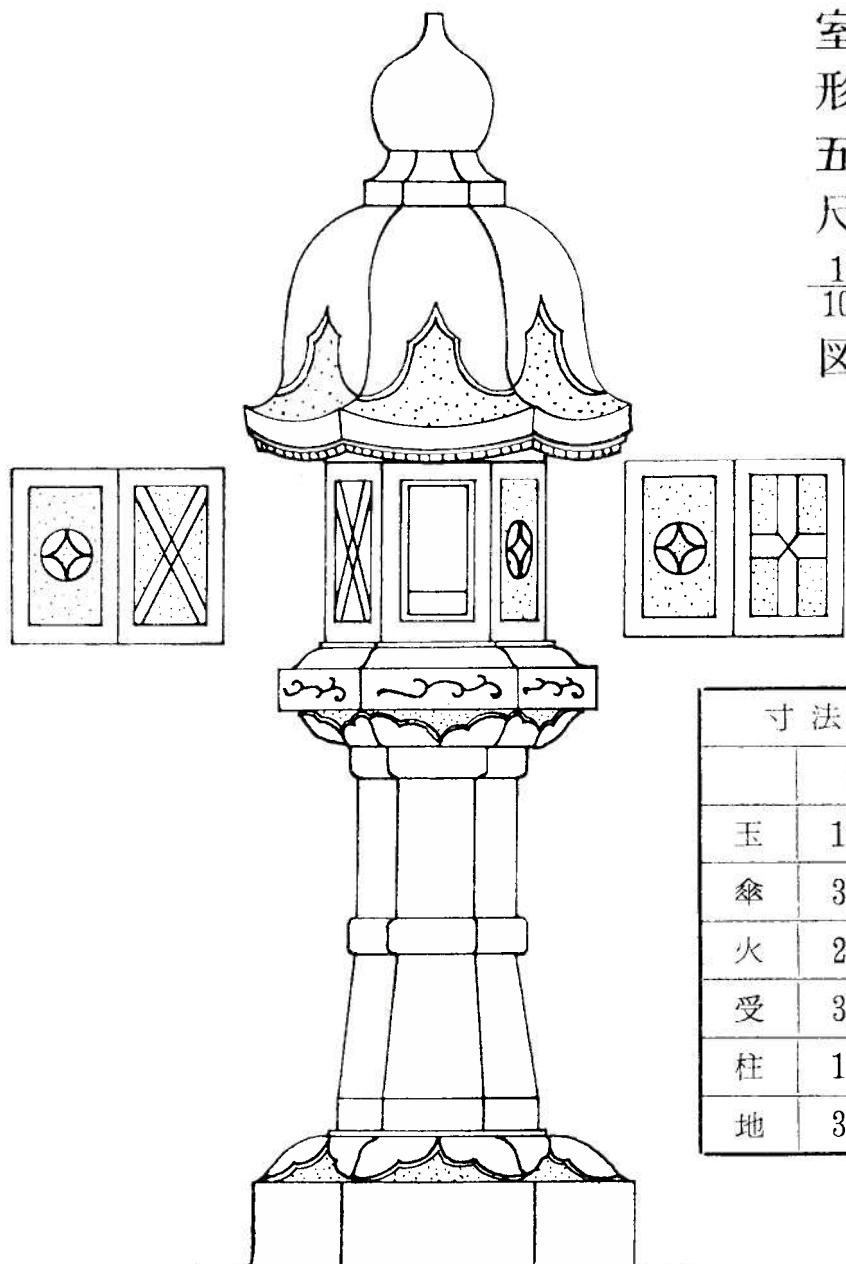
庚申灯籠

寸 法 比 率		
	径	高
玉	9%	12%
傘	36%	8%
火	16%	15%
受	26%	7%
柱	12%	46%
地	26%	12%



※ 宮立形と桂離宮内の折部形と折伸した形にしてミシリ
仕上げとして庭園の感じにした。
唯き仕上げ水磨き仕上げにすれば神、仏前用に使用出
来る。

御室形五尺
 $\frac{1}{10}$
 図



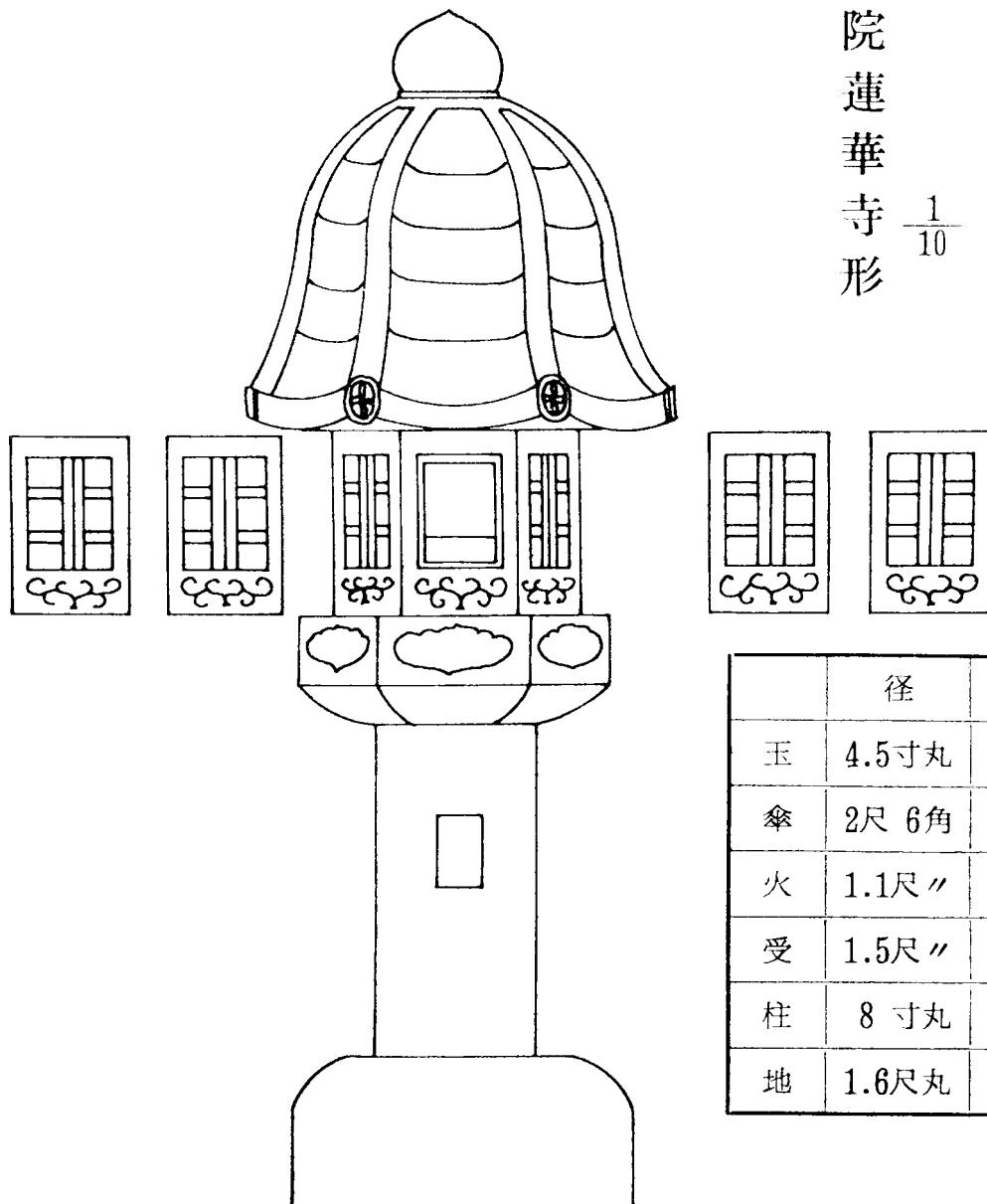
寸法比率表		
	径	高
玉	12%	8%
傘	36%	22%
火	20%	17%
受	30%	10%
柱	19%	34%
地	34%	12%

※ 柱は鎌倉時代の清瀧堂前石灯の柱に共通がある。

あれは八角垂直であるが何か転化された様である
 ように筆者は感じる。

青蓮院蓮華寺形

$\frac{1}{10}$



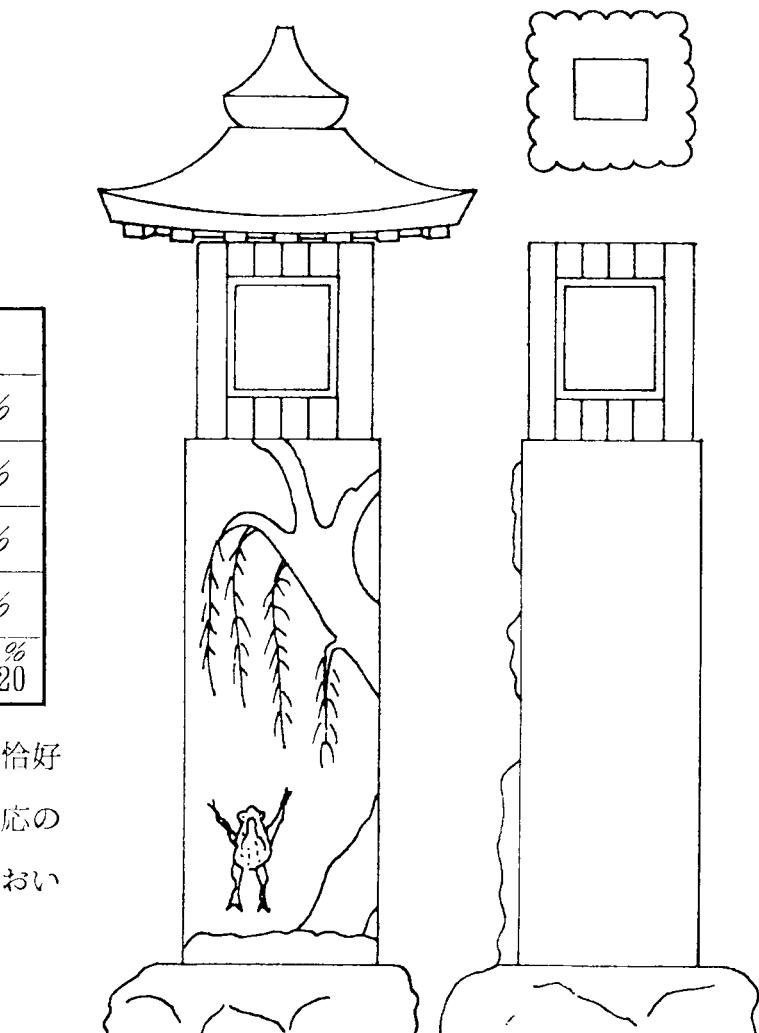
	徑	高
玉	4.5寸丸	3.5寸
龕	2尺6角	1.6尺
火	1.1尺〃	8.2寸
受	1.5尺〃	5寸
柱	8寸丸	1.5尺
地	1.6尺丸	7寸

道風形灯籠

寸法比率表

	径	高
玉	12%	11%
傘	40%	12%
火	18%	20%
柱	20%	57%
土台	% %	% %
	30~40	15~20

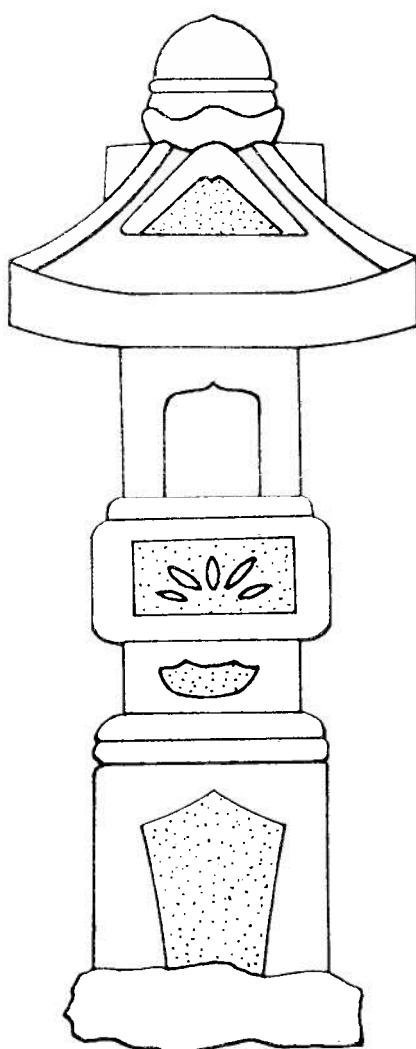
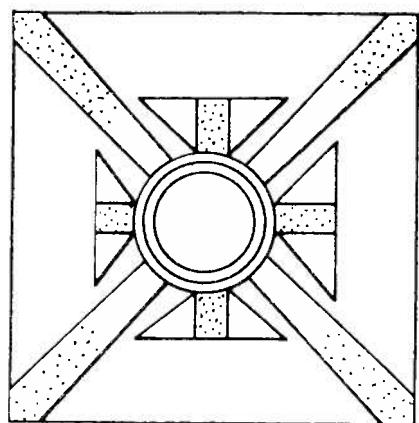
※ 土台は自然石にて恰好
良いのでよいが一応の
目安比率を出しておいた。



※ 火袋、柱は材石の都合で一石で
仕上げても、別々でもよい。

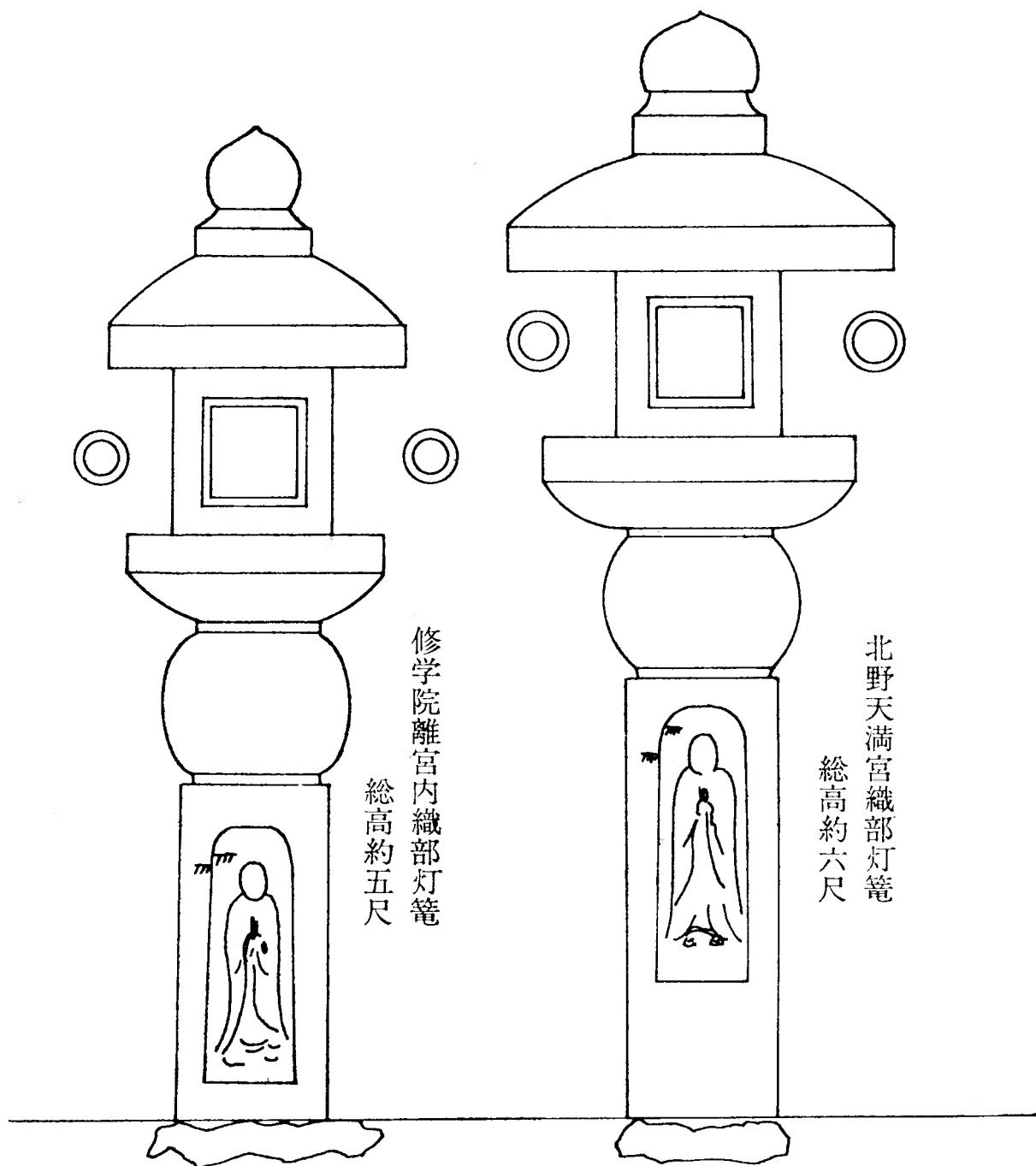
朝鮮燈籠　※ 一般的に作る形

16に書いておいた故必要寸法に応じて比率を出
して引延ばすこと。

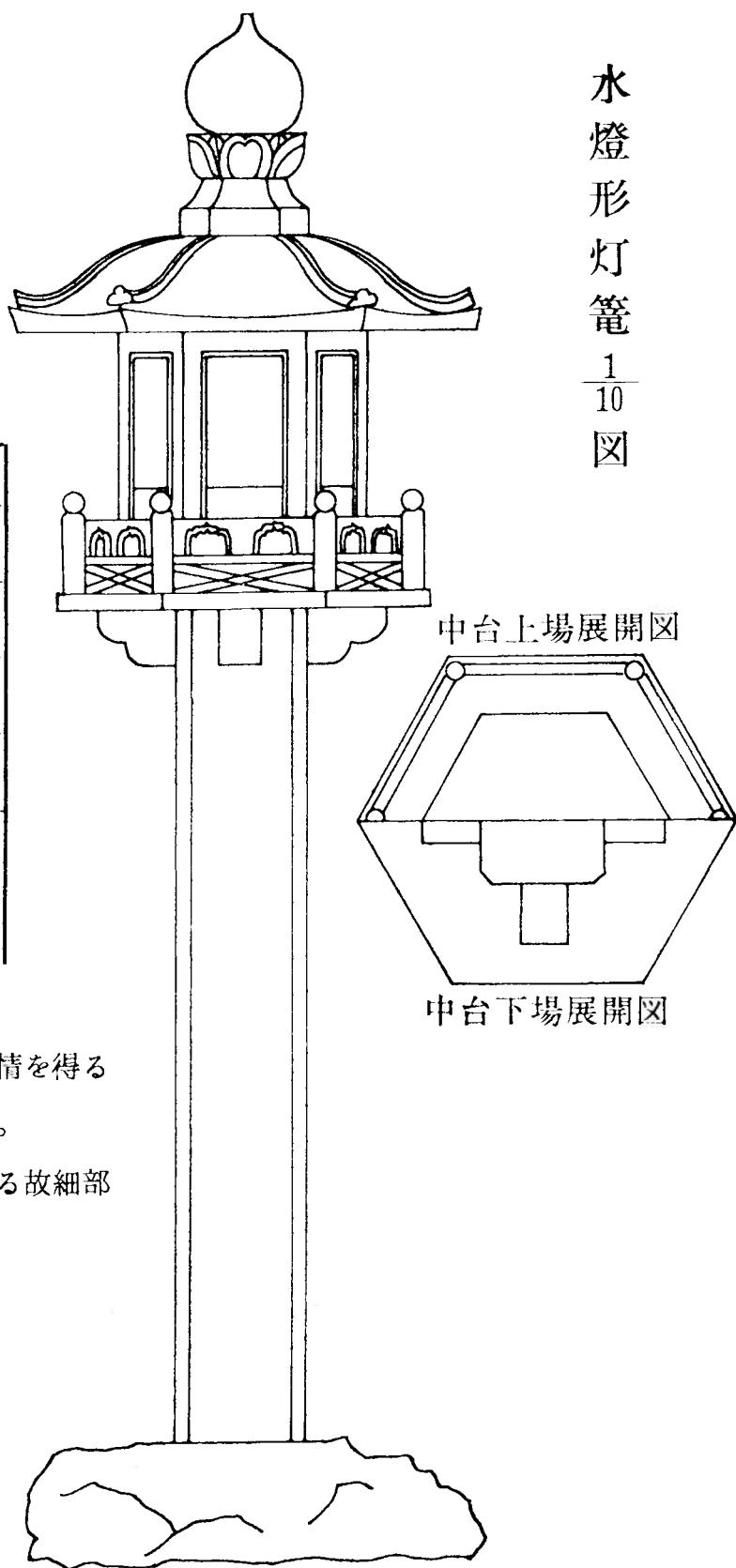


※ 傘一石他一石にて二ヶ石よりなる。

※ この外種々あり大同小異の感あり足元灯のよう
のもあるが共通点が多い。



水燈形灯籠
1/10
図

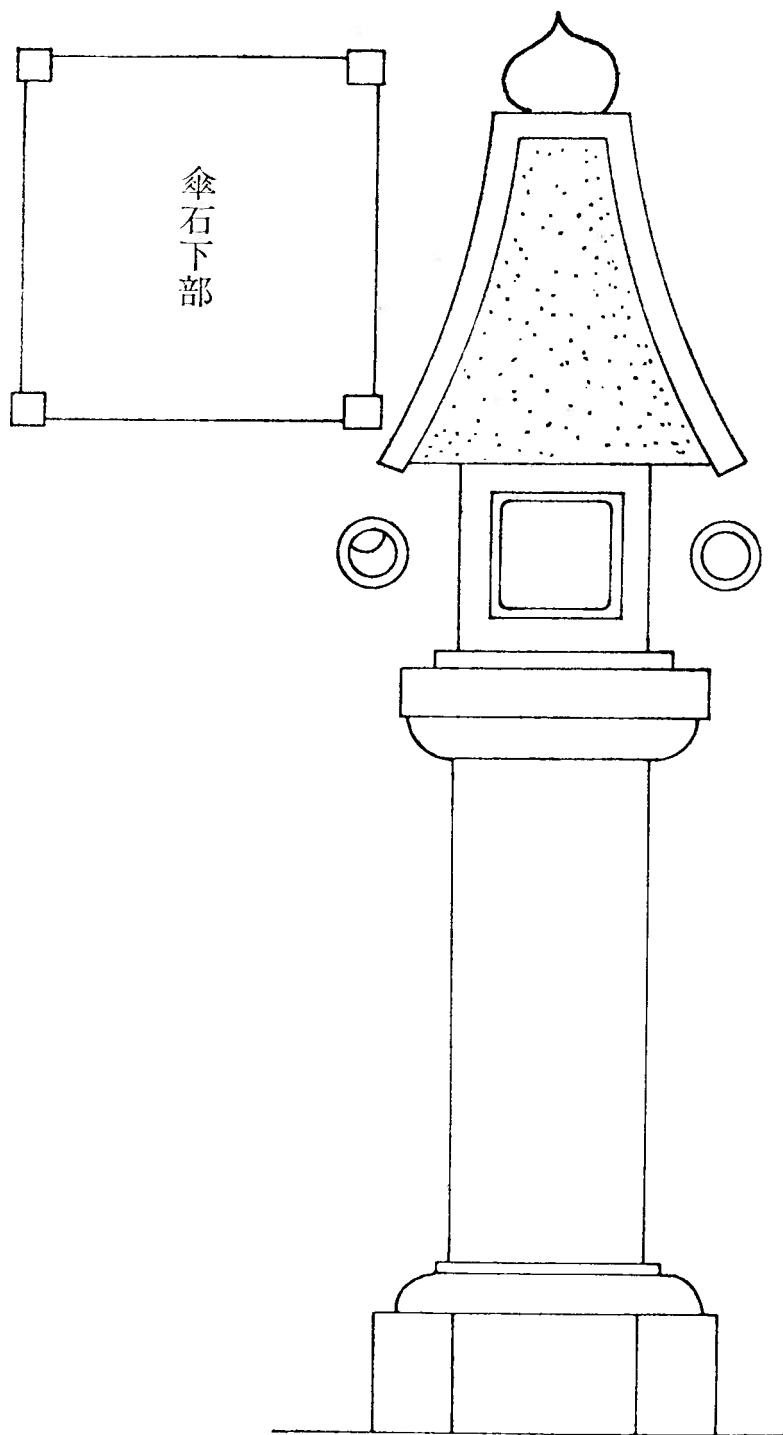


7 尺 恰 好 寸 法

	径	高
玉	尺六角 0.65	1.10
傘	2.40	0.45
火	1.20	1.10
中台	1.80	0.80
柱	大面取 0.65角	4.30
靴石	傘石位	径の 50%位

- ※ 水辺に灯が映じて余情を得る
処から名が生じたか。
- ※ 拾分の一に書いてある故細部
は恰好よく勘案する

角蓮華寺形灯笼



寸法比率表

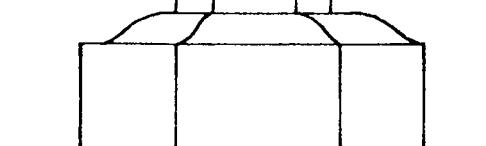
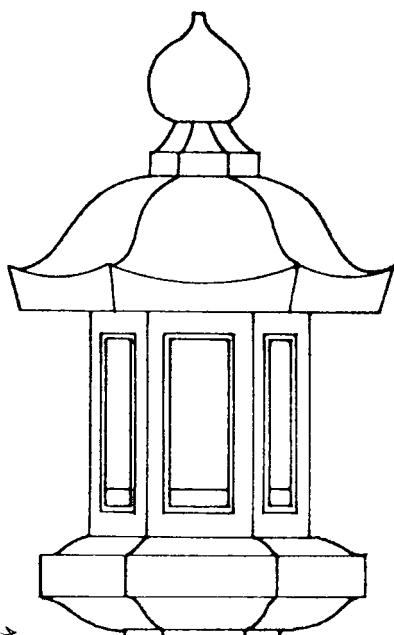
	前巾	奥行	高
玉	丸 8%	8%	6.1%
傘	角 26%	26%	26%
火	角 14%	14%	13%
受	角 22.5%	22.5%	8%
柱	13%	13%	36%
地	六角 24%	24%	12%

※ 出来上り総高さ 100%
の基本にしてある。

※ 拾分の壱の図になって
いるから細部は恰好よ
く勘案すること。

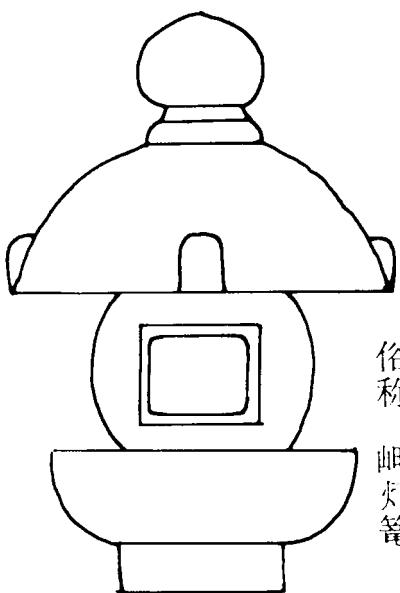
神、仏、前燈
 $\frac{1}{10}$ 恰好図

寸法比率表		
	径	高
玉	9.2%	15%
傘	33%	12%
火	18%	19%
受	27.5%	7.5%
柱	14%	38%
地	30%	11%

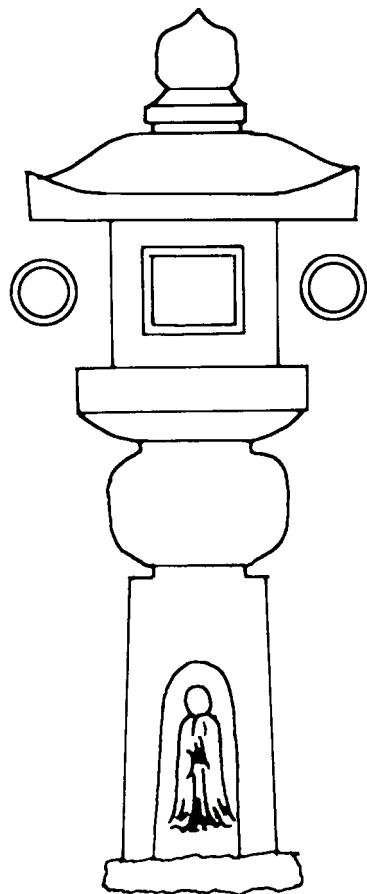


- ※ この寸法比率は灯籠の総高さを100%との基本である。
- ※ 算出寸法は六角の剣先から剣先である。
- ※ 玉は露盤の径の寸法であり宝珠は若干小さめにする。
- ※ 火袋の火口は六方抜きになっているが設置場所により側面意匠を勘案するとよい。

俗称 岬灯籠

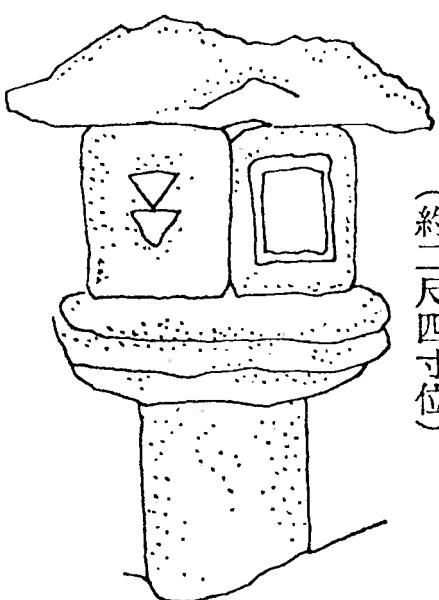


桂離宮内折部灯籠
(約五尺)

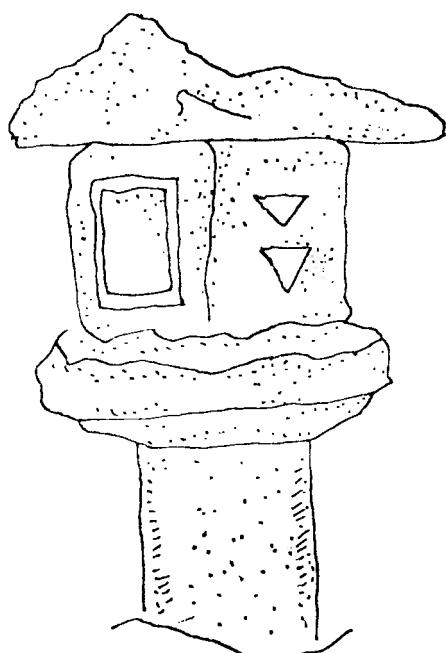


桂離宮内 池の端の水際の岩の上にあり

桂離宮内(螢灯籠)スケッチ図
(約二尺四寸位)



※火袋は四角で前後は火口となる
左右は三角窓となつてゐる



修学院離宮

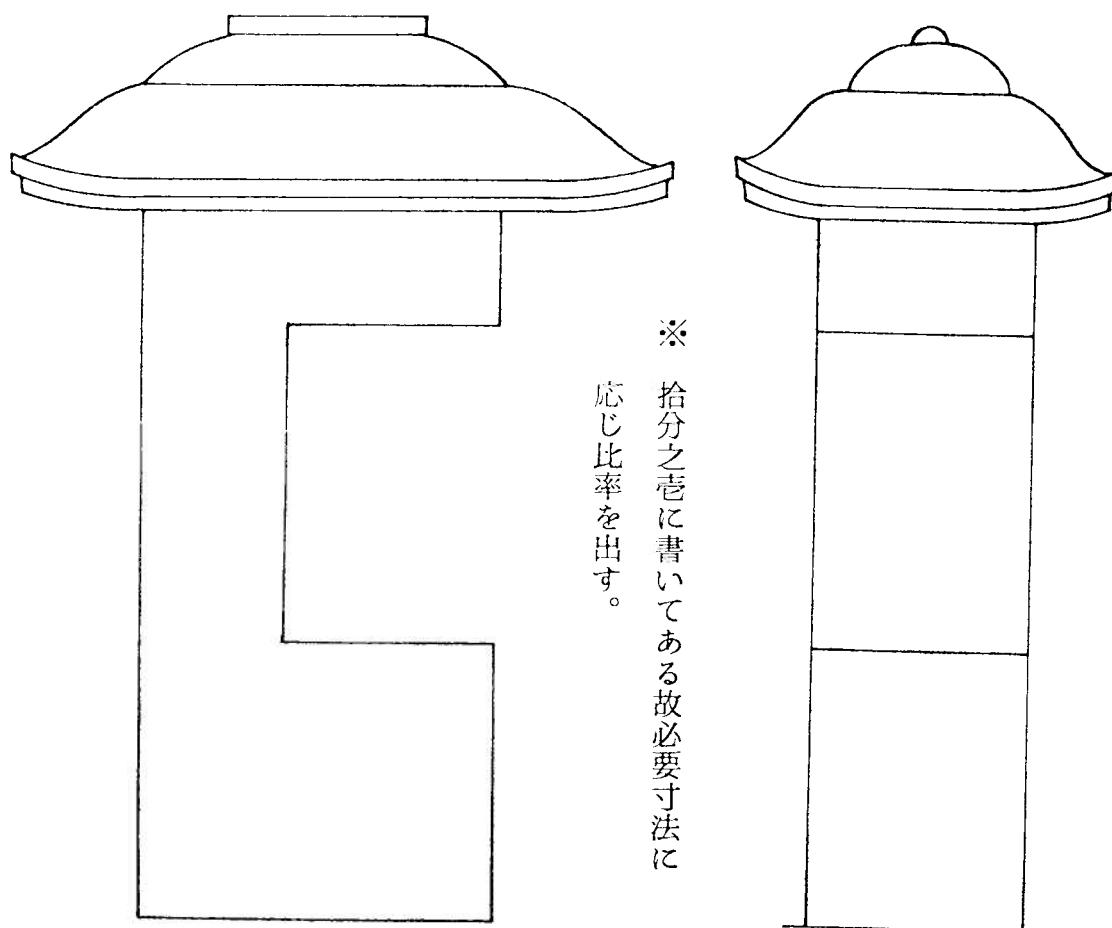
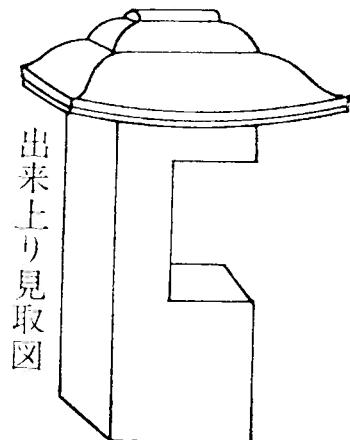
袖形燈籠

(別名鰐口燈籠)

※ これと類似した恰好のものが本願寺の庭に

あるが傘は八角竿長く袖口の方に吊り
燈籠が下がっている。

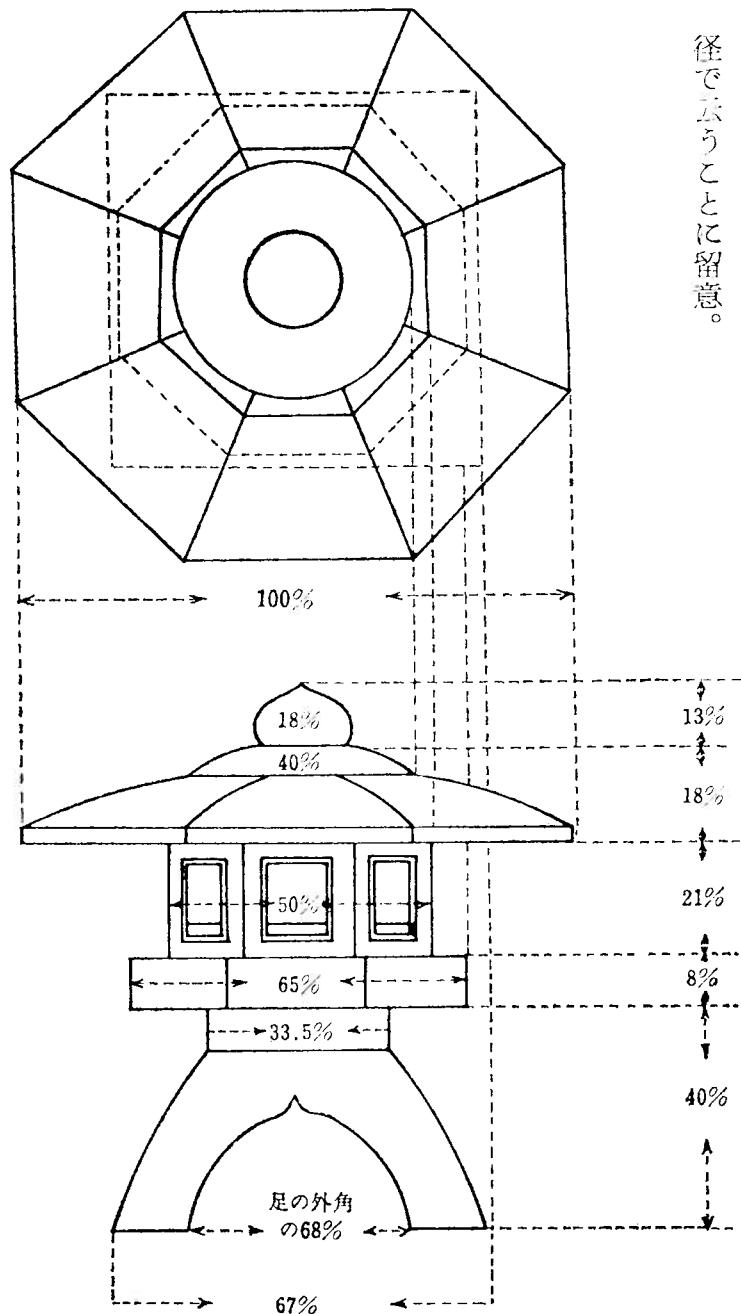
傘は談山神社の石幢の傘の感じである。



※ 拾分之壹に書いてある故必要寸法に

感じ比率を出す。

泉涌寺形雪見灯籠

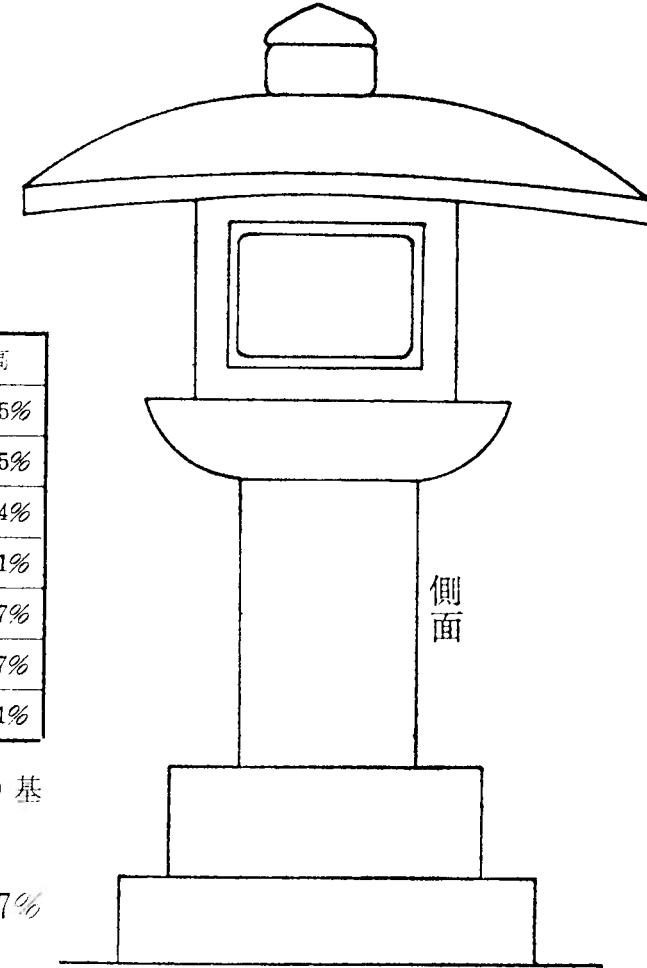
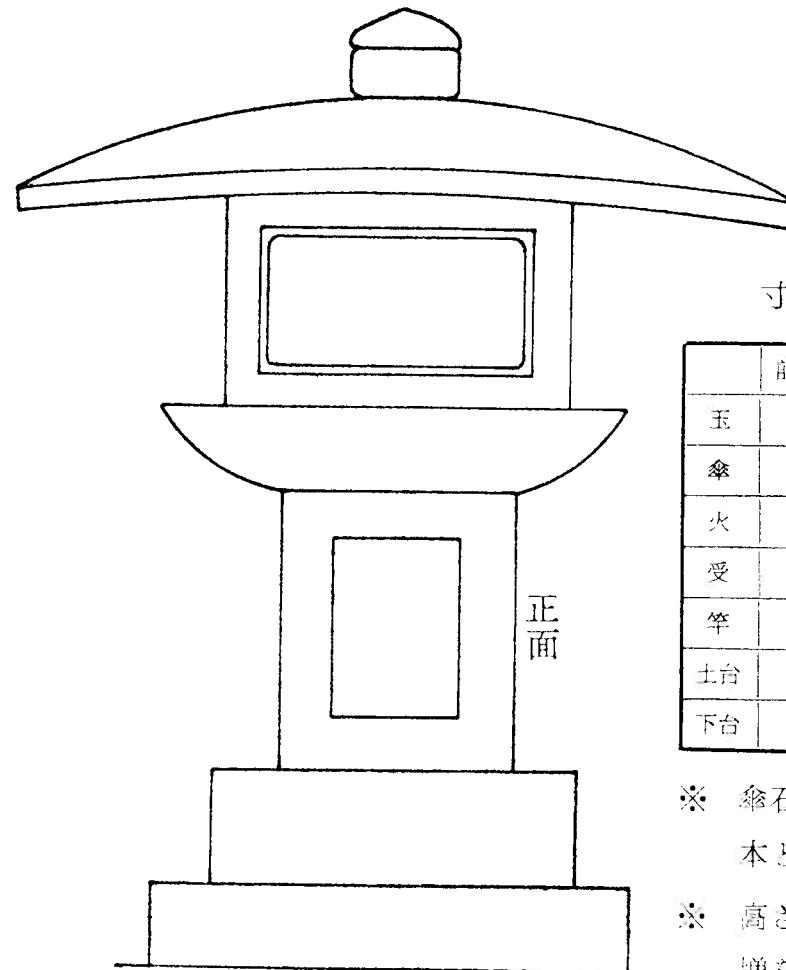


※ 下記比率の数字は笠石の径の寸法を基準としてある。

※ 雪見形の寸法は高さで表はさず笠の径で云うことに留意。

勸修寺形灯籠

※江戸時代



寸法比率表

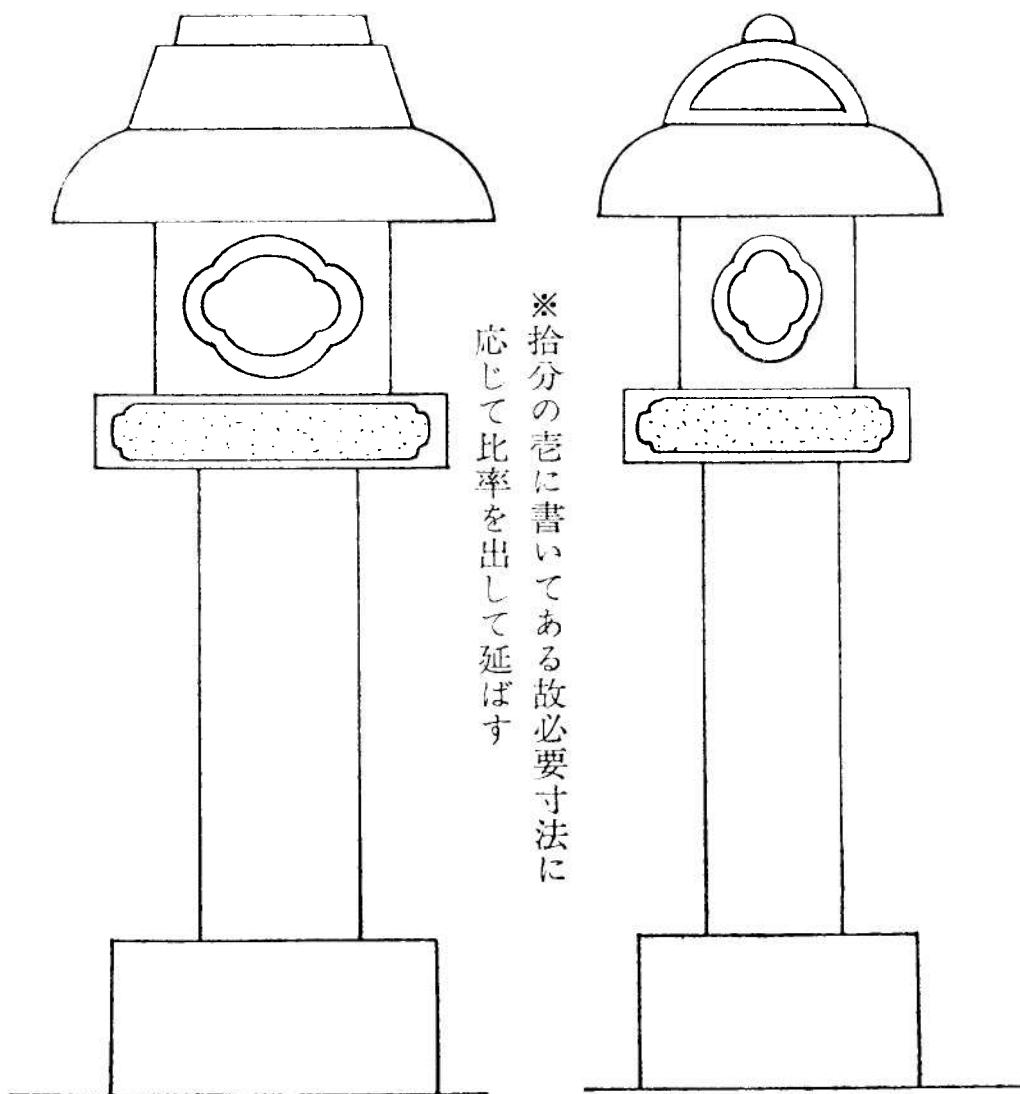
	前巾	奥行	高
玉	15%	15%	12.5%
傘	100%	81%	15%
火	45%	35%	24%
受	59%	48%	11%
竿	31%	22.5%	37%
土台	47%	40%	17%
下台	64%	53%	11%

※ 傘石前巾を100%の基
本としている。

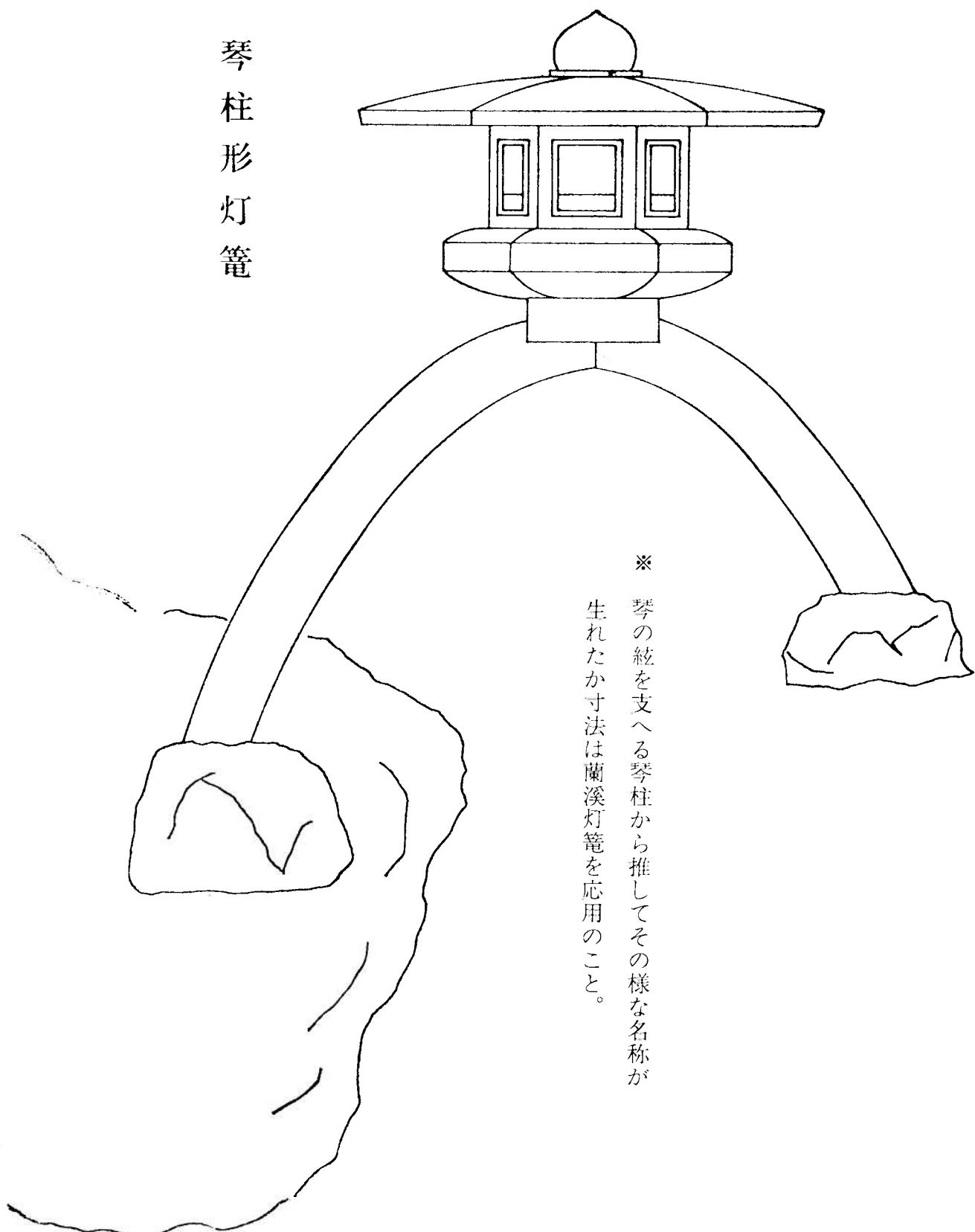
※ 高さを見るときは27%
増を目安とする。

葛屋形灯籠5尺 $\frac{1}{10}$ 図

(宇治松殿山莊)

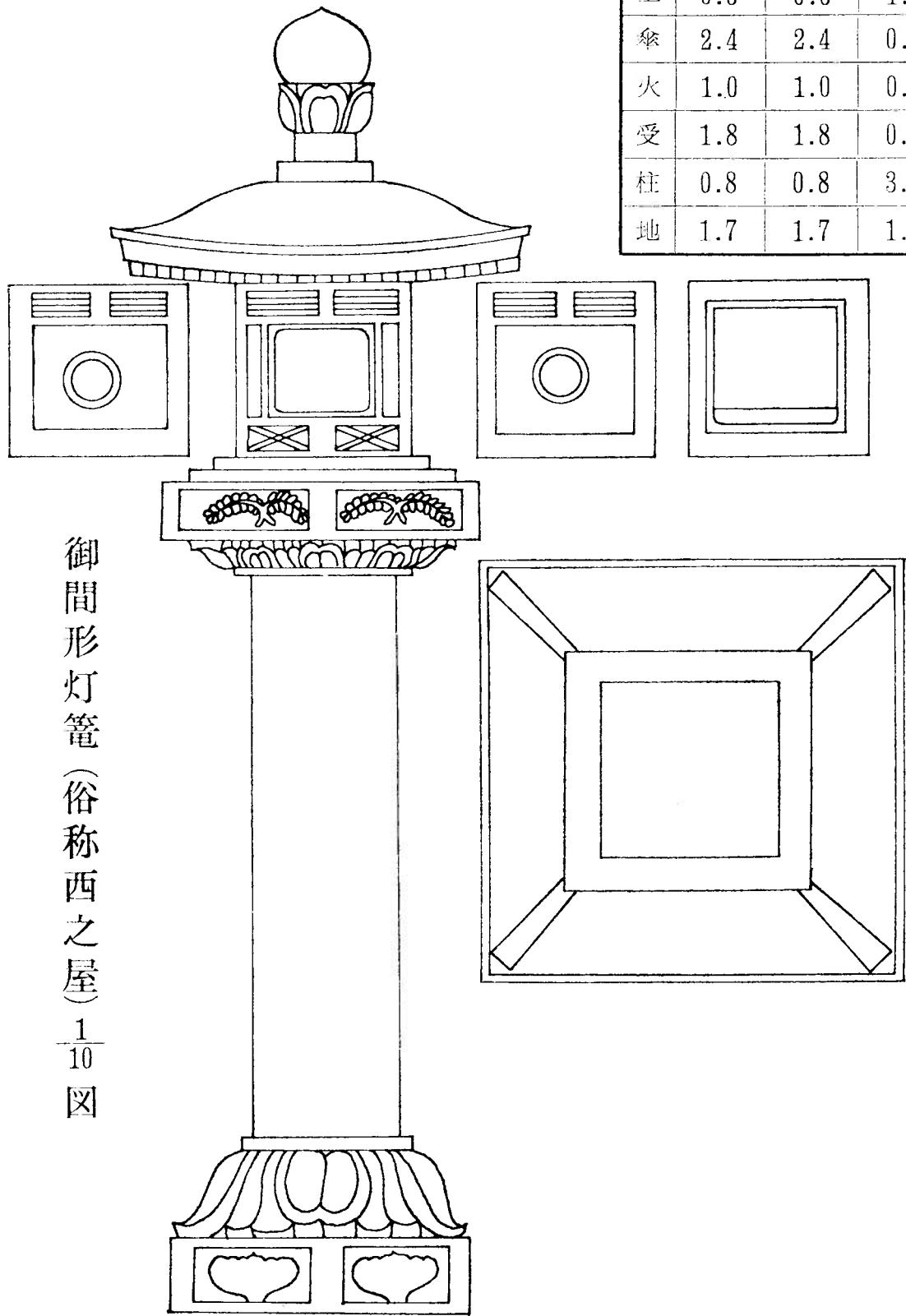


琴柱形灯笼



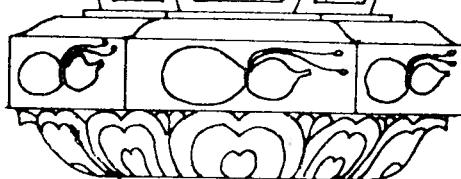
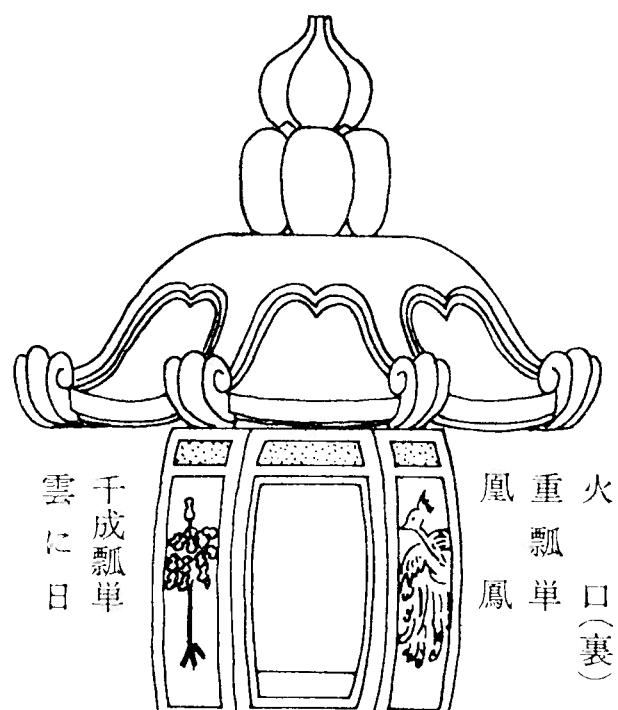
※

琴の絃を支へる琴柱から推してその様な名称が
生れたか寸法は蘭溪灯笼を応用のこと。

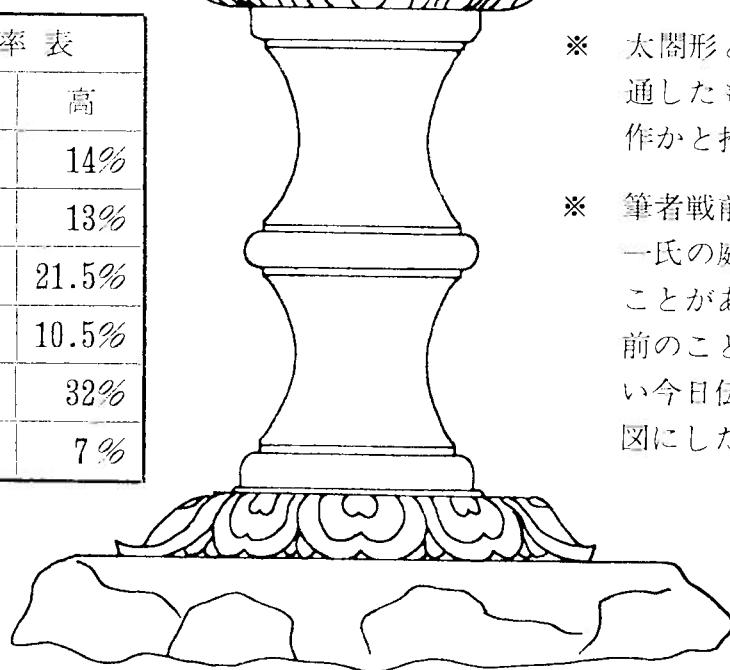


御間形灯籠（俗称西之屋）
— 1/10 —

太閣形灯籠 $\frac{1}{10}$ 図



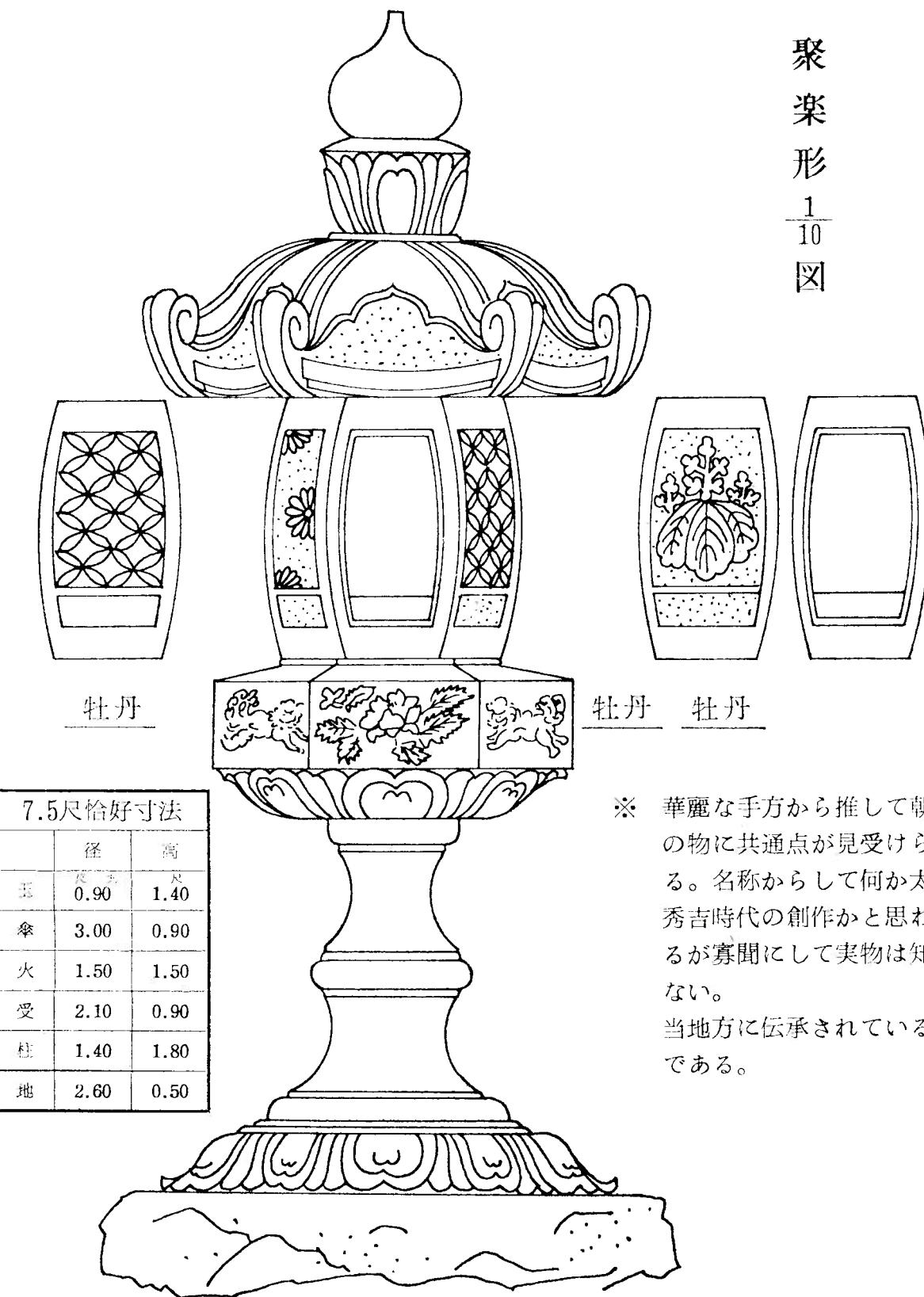
寸法比率表		
	径	高
玉	10%	14%
叢	39%	13%
火	20%	21.5%
受	30%	10.5%
柱	15%	32%
地	32%	7%



* 太閣形と聚楽形は形態に共通したものがあり同時代の作かと推考出来る。

* 筆者戦前、東京の故山岸宇一氏の庭で実物を拝見したことがあるが何分三十数年前のことでの記憶も定かでない今日伝承されているのを図にした。

聚 樂 形 $\frac{1}{10}$ 図



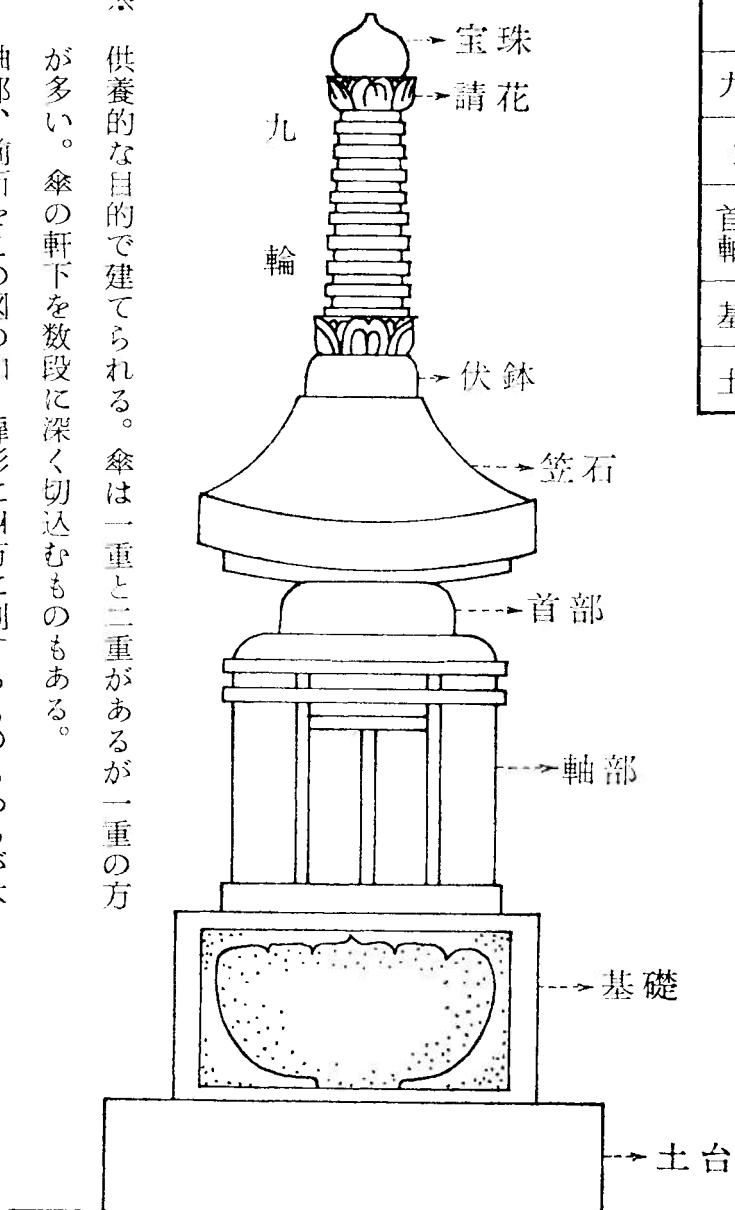
※ 華麗な手方から推して朝鮮の物に共通点が見受けられる。名称からして何か太閤秀吉時代の創作かと思われるが寡聞にして実物は知らない。
当方に伝承されている形である。

多宝塔 $\frac{1}{10}$ 恰好図

※

供養的な目的で建てられる。傘は一重と二重があるが一重の方が多い。傘の軒下を数段に深く切込むものもある。

軸部、前面をこの図の如く扉形に四方に刻するものもあるが本図は正面のみにした。製作に当たり占い造物を参照。



	径	高
九輪	5寸丸	1.75尺
笠	1.5角	0.8尺
首部 軸部	1.3丸	1.5尺
基礎	1.7角	0.9
土台	2.3角	0.5

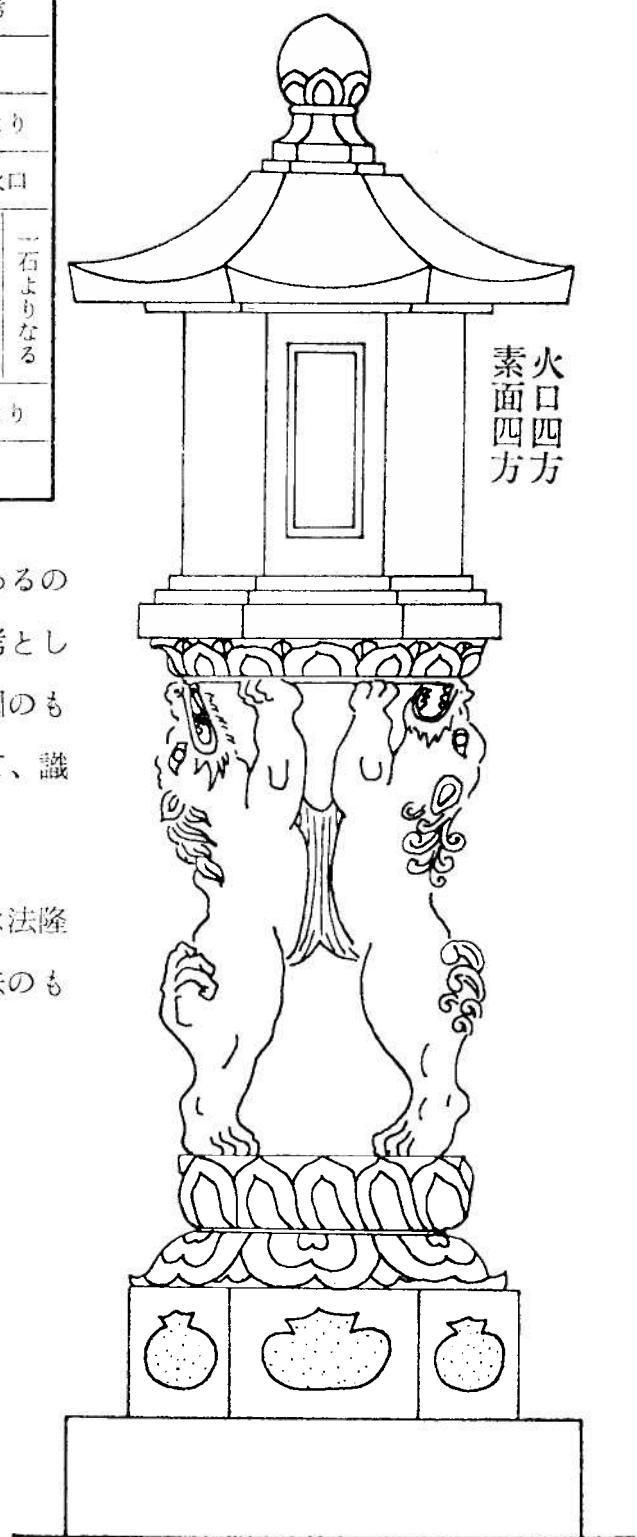
※ 多宝塔由来

釈迦如来が説法をしているとき、多宝如来が塔の中にいてその説法を聞いて善哉善哉とほめて塔の扉を開いて釈迦を迎へ入れたと云われる。

新羅統一時代 双獅子石灯（約十尺）

復元製作寸法

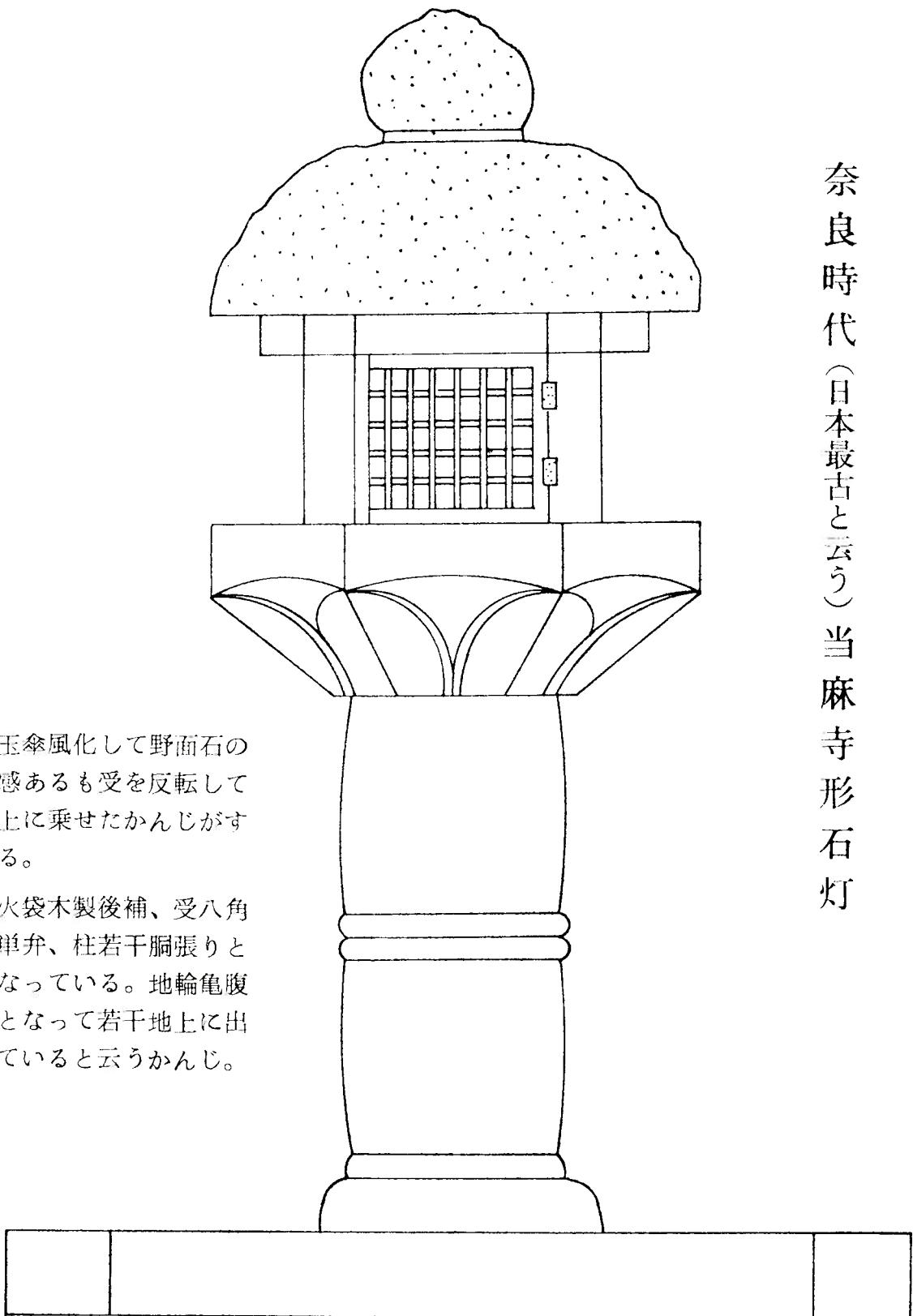
	径	高	備 考
宝珠	0.7 尺	1.0 尺	
傘	3.4	1.0	八角側面より
火袋	1.8	1.6	ノ四方火口
受鉢	2.4	0.7	ノ側面より 一石よりなる
双獅柱	2.1	3.0	双獅子彫刻
獅子台	2.0	0.5	丸捻花
地輪	2.6	1.2	八角側面より
土台	3.4	0.4	四 角



※ 宝珠から下が欠けて不明であるので同一時代の石燈三四を参考として敢えて冒険をおかして右図のもと筆者が製作したのであって、識者の叱声を乞うのみである。

※ 双獅子足下の蓮台の捻り花は法隆寺宝物殿仏像台にも同じ手法のものがある。

奈良時代（日本最古と云う）当麻寺形石灯



- ※ 玉傘風化して野面石の感あるも受を反転して上に乗せたかんじがする。
- ※ 火袋木製後補、受八角単弁、柱若干胴張りとなっている。地輪亀腹となって若干地上に出ていると云うかんじ。